ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

X－4

1983

滋賀県教育委員会
財団法人 滋賀県文化財保護協会

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

X－4

1983

00/.2
5h27

滋賀県教育委員会
財団法人滋賀県文化財保護協会

序

滋賀県下のほ場整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、はや10年目を迎えることになりました。この間ほ場整備事業の拡大に伴い発掘調査件数も年々増加してきました。

このような状況のもとで発掘調査と開発事業との間で大きな問題が生じることなく発掘調査が円滑に実施出来ておることは関係機関の御理解の賜ものと感謝いたします。

発掘調査で得られた資料や成果を公開し、広く県民に提供するため、ここに昭和57年度に実施しました発掘調査の報告書を刊行することにいたしました。

この報告書が、滋賀の埋蔵文化財に関する理解を深めていただく一助となれば幸いであります。

最後にこの調査に御協力をいただきました地元関係者および関係機関の方々に対し厚くお礼申し上げます。

昭和58年３月

滋賀県教育委員会事務局
文化部文化財保護課長
外　池　忠　雄

例　　言

1．本報告書は、昭和57年度県営ほ場整備に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち、県農林部の費用負担にかかる調査成果を収載した。

2．本報告書は、昭和57年度事業の第4分冊にあたり、湖南地区の5遺跡を収録した。

3．調査にあたっては、県農林部耕地建設課、草津県事務所土地改良課、守山市、中主町教育委員会から種々の協力を得た。

4．現地調査は、本県教育委員会文化財保護課技師大橋信弥を担当者とし、滋賀県埋蔵文化財センター谷技師谷口　徹を主任調査員に得て実施した。

5．調査に協力を得た諸氏については、各遺跡ごとに記した。厚く感謝の意を表する次第である。

6．本報告書は、大橋・谷口が編集・執筆し、遺物写真等で寿福　滋氏の多大なる協力を得た。また、各章の文責は第1章が谷口、第2～第5章が大橋である。

目　　次

例　　言

第１章　守山市赤野井遺跡

１．は　じ　め　に…… 1

２．調　査　結　果…… 1

３．お　わ　り　に…… 15

第２章　守山市小浜遺跡

１．は　じ　め　に…… 23

２．調　査　結　果…… 23

３．ま　　と　　め…… 27

第３章　守山市幸津川遺跡

１．は　じ　め　に…… 31

２．調　査　結　果…… 31

３．ま　　と　　め…… 34

第４章　守山市服部遺跡

１．は　じ　め　に…… 37

２．調　査　結　果…… 37

３．ま　と　め…… 39

第５章　中主町八夫遺跡

１．は　じ　め　に…… 43

２．調　査　結　果…… 43

３．ま　　と　　め…… 47

挿　図　目　次

第１図　赤野井遺跡位置図……2
第２図　赤野井遺跡トレンチ設定図（Ｓ１～Ｓ18・Ｔ－１～Ｔ－20）……2
第３図　Ｓ１トレンチ、ＳＤ３護岸施設実測図……4
第４図　Ｓ１トレんチ遺構実測図……5
第５図　Ｓ３トレンチ遺構実測図……8
第６図　Ｓ２・Ｓ６・Ｓ７・Ｓ12・Ｓ16トレンチ遺構実測図……10
第７図　Ｔ６・Ｔ10・Ｔ14トレンチ遺構実測図……13
第８図　Ｓ１トレンチ、掘立柱建物柱穴出土土器実測図……16
第９図　Ｓ１トレンチ、ＳＫ２出土土器実測図……17
第10図　Ｓ１トレンチ出土土器実測図……18
第11図　Ｓ１・Ｓ３・Ｓ10・Ｓ12・Ｓ16トレンチ出土土器実測図……19
第12図　小浜遺跡位置図……23
第13図　小浜遺跡柱状断面図(1)……24
第14図　小浜遺跡トレンチ設定図……25
第15図　小浜遺跡柱状断面図(2)……27
第16図　幸津川遺跡位置図……31
第17図　幸津川遺跡トレンチ設定図……32
第18図　幸津川遺跡柱状図断面図……33
第19図　服部遺跡位置図……37
第20図　服部遺跡トレンチ設定図……38
第21図　服部遺跡柱状断面図……39
第22図　八夫遺跡位置図……43
第23図　八夫遺跡断面柱状図(1)……44
第24図　八夫遺跡トレンチ設定図……45
第25図　八夫遺跡断面柱状図(2)……47

図　版　目　次

図版１．赤 野 井 遺 跡　(上)南西端掘立柱建物群〔Ａ群〕検出状況(北西より)
(下)Ｓ１トレンチ　ＳＸ１及び周辺の掘立柱建物群〔Ｂ群〕検出状況（南西より）

図版２．赤 野 井 遺 跡　(上)Ｓ１トレンチ　沼沢地上を流れるＳＤ３及びそれ以南に広がる掘立柱建物群〔Ｂ群〕検出状況(北東より)
(下)Ｓ１トレンチ　ＳＤ14及び周辺の掘建柱建物群〔Ｃ群〕検出状況(南より)

図版３．赤 野 井 遺 跡　(上)Ｓ１トレンチ　ＳＫ17・18・19及び周辺の掘立柱建物群〔Ｃ群〕検出状況(南西より)
(下)Ｓ１トレンチ　ＳＫ13及び周辺の掘立柱建物群〔Ｄ群〕検出状況（南より）

図版４．赤 野 井 遺 跡　(上)Ｓ１トレンチ　北東端掘立柱建物群〔Ｄ群〕検出状況(南西より)
(下)Ｓ１トレンチ　北東端掘立柱建物〔Ｄ群〕検出状況(南西より)

図版５．赤 野 井 遺 跡　(上)Ｓ１トレンチ　北東端掘立柱建物群〔Ｄ群〕検出状況(南東より)
(下)Ｓ１トレンチ　柱穴内柱根出土状況

図版６．赤 野 井 遺 跡　(上)Ｓ１トレンチ　ＳＫ完掘状況(北西より)
(下)Ｓ１トレンチ　南東壁面ＳＤ３及び沼沢地断面図(北西より)

図版７．赤 野 井 遺 跡　(上)Ｓ１トレンチ　ＳＤ３護岸施設出土状況(北東より)
(下)Ｓ１トレンチ　ＳＸ１検出状況(南西より)

図版８．赤 野 井 遺 跡　(上)Ｓ３トレンチ　全　　景(南西より)
(下)Ｓ12トレンチ　全　　景(南東より)

図版９．赤 野 井 遺 跡　(上)Ｓ16トレンチ　全　　景(北西より)
(下)Ｔ10トレンチ　調査風景(北西より)

図版10．赤 野 井 遺 跡　(上)Ｔ10トレンチ　全　　景(北西より)
(下)Ｔ10トレンチ　ＳＤ１及び周辺の掘立柱建物群検出状況(北西より)

図版11．赤 野 井 遺 跡　(上)Ｔ10トレンチ　掘立柱建物群検出状況(北西より)
(下)Ｔ10トレンチ　ＳＫ１検出状況(北西より)

図版12．小　浜　遺　跡　(上)調　査　全　景
(下)調　査　全　景

図版13．小　浜　遺　跡　(上)調　査　遠　景
(下)埋めもどし状況

図版14．小　浜　遺　跡　(上)調　査　風　景
(下)調　査　近　景

図版15. 幸津川遺跡 (上)調査風景
(下)調査風景
図版16. 八夫遺跡 (上)調査前全景
(下)調査前全景
図版17. 八夫遺跡 (上)調査前全景
(下)調査状況
図版18. 八夫遺跡 (上)調査状況
(下)調査状況

第１章　守山市赤野井遺跡

1．は　じ　め　に

本報告は、守山市に所在する赤野井遺跡について、昭和57年度に実施したほ場整備事業に伴う発掘調査の成果を収めたものである。

赤野井遺跡は、ここ数年来、ほ場整備事業を始め宅造などに伴って、継起的に発掘調査が実施されており、赤野井町を中心に十二里町・石田町・杉江町などにも、河道や低湿地を隔てて連綿と広がることが確認されてきている。今回調査を実施したＳ区は、現杉江集落の南東に位置しており、狭義の杉江東遺跡内に収まる。Ｔ区は、現赤野井集落と杉江集落の中間に位置しており、狭義の赤野井遺跡西端部を構成している。

発掘調査は、幹線・支線の両水路工事路線にそって、Ｓ区で18ヶ所（Ｓ１～Ｓ18）、Ｔ区で20ヶ所（Ｔ１～Ｔ20）の合計38ヶ所に試掘トレンチを設定した。試掘調査の結果、遺構の確認されたトレンチでは、その広がりに応じてトレンチを拡張した。現地調査は、昭和57年７月１日より９月11日までの約２ヶ月半を要し、以後、整理作業を行なった。

2．調　査　結　果

Ｓ　　区

Ｓ１トレンチ（図３・４・８・９・10・11）

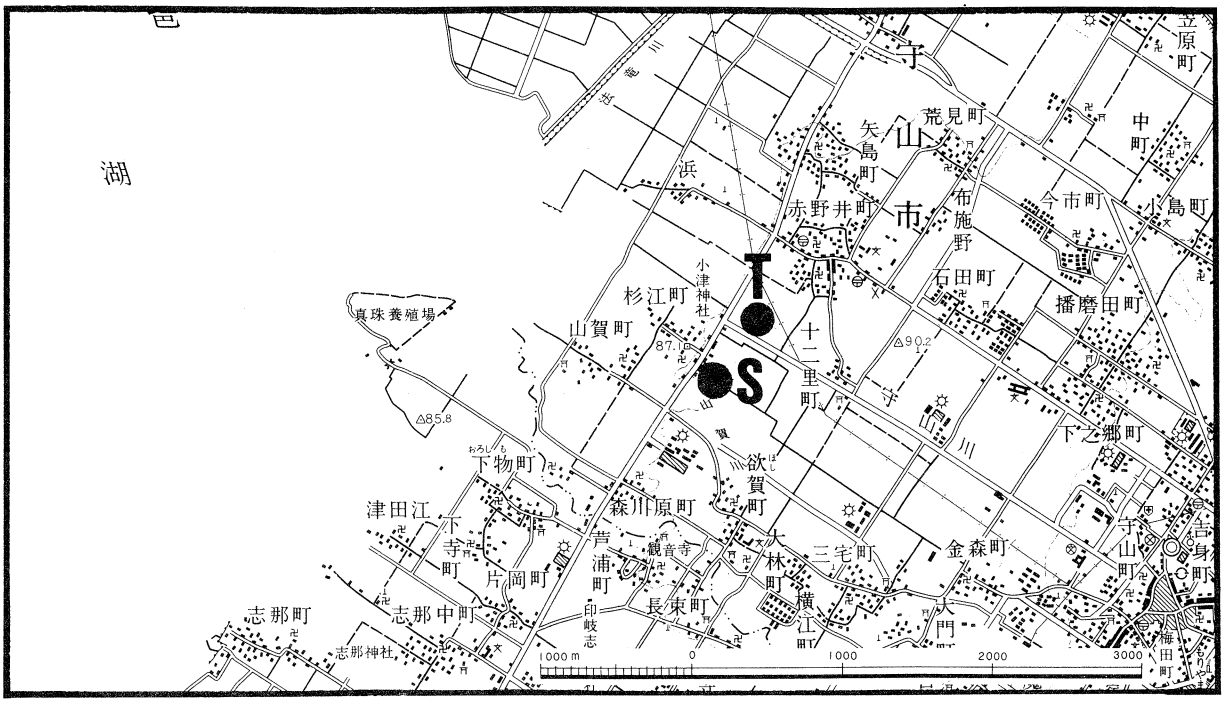
幹線水路部にそって、巾10ｍ、長さ 100ｍのトレンチを設定した。先年の調査で、当トレンチ北東方向 200ｍ間に中世村落遺構を確認しており、それに連続する遺構の広がりが予想された。

調査の結果、耕土層・床土層を順次削平すると、灰褐色砂質土からなる地山が露呈し、この地山を切り込んで、予想どおり中世村落遺構が検出された。遺構は４群の掘立柱建物を主に、土坑、溝、河道、沼沢地などより構成される。

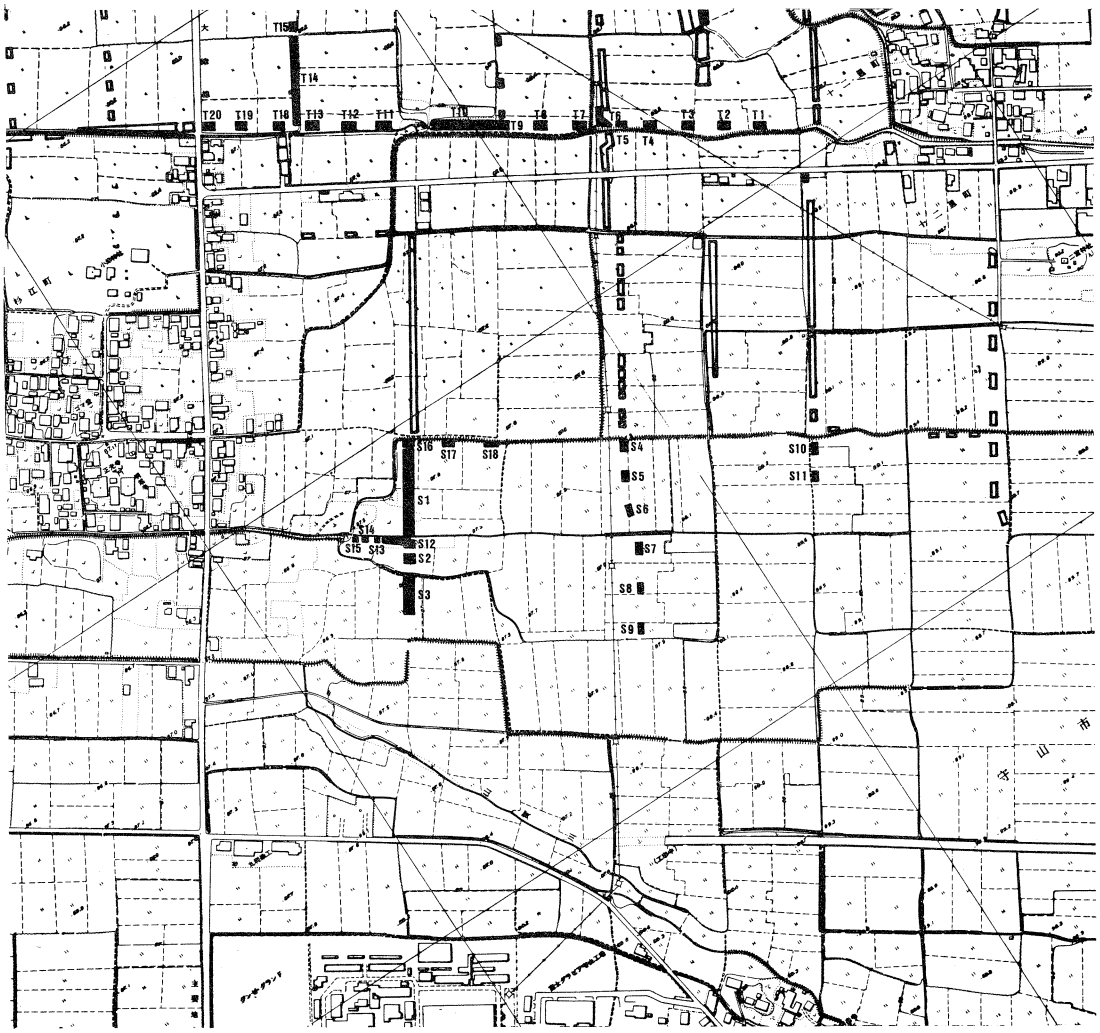
掘立柱建物（図４・８）

トレンチ南西端（Ａ群）、ＳＫ１付近（Ｂ群）、ＳＫ18付近（Ｃ群）、北東端（Ｄ群）の４群が識別される。溝や沼沢地などによって分離される傾向が認められ、Ａ群は後世の削平を受けて大半が消失している。Ｄ群の西方で検出した掘立柱建物は３間×１間以上の総柱からなる倉庫址と考えられ、一度建て変えられている。倉庫址の周囲には柵がめぐって、他の掘立柱建物とは画されている。柵外の掘立柱建物はＡ～Ｃ群の掘立柱建物と同様、数間×数間の比較的小規模なものが蝟集する。いずれの建物も、若干の振幅は認められるが、野洲郡条里Ｎ－34°－Ｅの方位が意識されている。

柱穴内より出土した遺物（図８）は、黒色土器埦、土師質中皿・小皿、土師質羽釜、土師質甕、陶質鉢、白磁埦、須恵質坏蓋・坏身、土師質土錘それに柱根など比較的豊富である。黒色土器埦（Ｂ01～Ｂ25）は、ヘラミガキの手法がわずかに口縁部に散見されるにとどまり、暗文の手法が一般化している。瓦器の強い影響下に生まれたいわゆる「近江型」の黒色土器と考えられる。大橋信弥氏の編年案[注①]に従えば、〝杉江遺跡ＳＤ２〟例以降の所産であり、そのなかでも浅い埦部、粗雑な暗文、退化した高台等、比較的新しい様相を示すものが多く見い出される。なお、Ｂ24・Ｂ25は、ともに口径が10cm前後と小さく、器壁も薄手の一群のものであるが、瓦器



第１図．赤野井遺跡位置図



第２図．赤野井遺跡トレンチ設定図（Ｓ１～Ｓ18・Ｔ1～Ｔ20）

あるいは瓦質土器のように堅緻ではない。B26は内外面黒色の中皿である。

土師質中皿は、３類が判別される。１類はE05～E07の、口縁部を指でつまみ上げ横ナデを加えたもので、端部は外反する。２類はE08～E13の、口縁部引き起こしの結果、端部が内傾気味のものである。肉厚はほぼ一定している。３類はE14～E19の、立ち上がり部に強い指押えを加えた結果、器壁が薄くなり反面口縁部が肥厚してきたものである。横田洋三氏の編年案[注②]に従えば、1類がA1タイプ、２類がＡ２タイプ、３類がＡ３タイプにほぼ相応する。土師質小皿は、先の中皿の分類に従って２類（E20～E31）と３類（E32～E45）が判別され、同じく横田編年案のＡ２タイプとＡ３タイプに相応する。E20・E21は、口縁端部外面に押しナデが加えられている。

土師質羽釜は、内傾する口縁部の端を厚くかつ丸く収めやや内側にせり出させたタイプのもので、稲垣普也氏の編年案[注③]に従えば、C型式に相応するものである。以上、柱穴内より出土した土器を概観すると、概ね平安時代末から室町時代初頭頃にかけて、掘立柱建物が構築されつづけたものと考えられる。

ＳＫ２（図４・９）

L字形をした土坑である。地山Ｉ層の灰褐色砂質土層より切り込まれ、地山Ⅲ層の灰褐色砂礫層中に底部を置く。底部はU字形を呈し、深さ60cmを計る。覆土は３層よりなり、③層の泥土層を分離して下層に、①・②層を上層として遺物の取り上げを行なった。その結果、大半の遺物が上層特に①層中から出土し、下層から出土したのは、黒色土器椀２点（B01・B02）に限られた。上層からの出土遺物は比較的豊富で、黒色土器椀21点（B03～B23）の他、土師質中皿（E01・E02）・小皿（E03～E08）がある。黒色土器椀は、ヘラミガキの手法を口縁部内外にわずかに残すものが散見されるにとどまり、暗文の手法が一般化している。そのなかでも下層出土のB01・B02は、ヘラミガキの手法を良く残し、暗文も比較的丁寧に施すなど古相を示すが、上層出土土器の中には、椀部がやや浅くなり、粗雑化した暗文、退化した高台等、新しい様相を加えたものが出現している。

土師質中皿は、口縁部を指でつまみ上げ横ナデを加えた A1タイプのものである。小皿はA1タイプの他A2タイプのものが散見される。概ね平安時代末から鎌倉時代初頭期の一括性のある遺物と言えよう。

ＳＫ13（図４）

楕円形を予想させる土坑である。黒灰褐色砂質土の浅いレンズ状堆積をなす。

ＳＫ14（図４）

L字形をした溝状の土坑である。黒灰褐色砂質土の浅いレンズ状堆積をなす。

ＳＫ15（図４）

正円形に近い土坑である。暗灰褐色粘質土の浅いレンズ状堆積をなす。

ＳＫ16（図４）

断面が椀状を呈する土坑である。覆土は、①暗灰褐色粘質土層、②黄灰褐色粘質土層、③黒灰褐色粘土層の３層が識別される。

ＳＫ17・ＳＫ18・ＳＫ19（図４・10）

３基の方形を基調とする土坑が、おのおの切り合い関係をなして検出された。断面観察の結果、ＳＫ19が最も古く、ＳＫ17→ＳＫ18の順に新しくなることが判明した。ＳＫ17は①黒灰褐色砂質土層、ＳＫ19は④暗灰褐色砂質土層のそれぞれ単純層によって埋まり、ＳＫ18は②暗灰褐色砂質土層と③黒灰色泥土層の２層の覆土によっておおわれている。ＳＫ18の③層内より土師質小皿３点（E01～E03）が出土している。Ａ１タイプ（E

01）とＡ２タイプ（Ｅ02・Ｅ03）が確認される。

ＳＫ20（図４）

円形の土坑である。地山Ｉ層の灰褐色砂質土層より切り込まれ、地山Ⅲ層の灰褐色砂礫層中に底部を置く。底部は不定形ながらＵ字形を呈し、深さ 110cmを計る。覆土は５層よりなる。①黒灰褐色粘土層、②黒灰褐色粘土と灰褐色砂質土のブロック、③灰褐色粘土と黄褐色粘土と灰褐色砂質土のブロック、④黒灰色粘土と灰褐色粘土のブロック、⑤黒灰色泥土層が順次堆積を重ねている。形状から推して、円形素掘りの井戸であった可能性も考えられる。

ＳＫ21（図４）

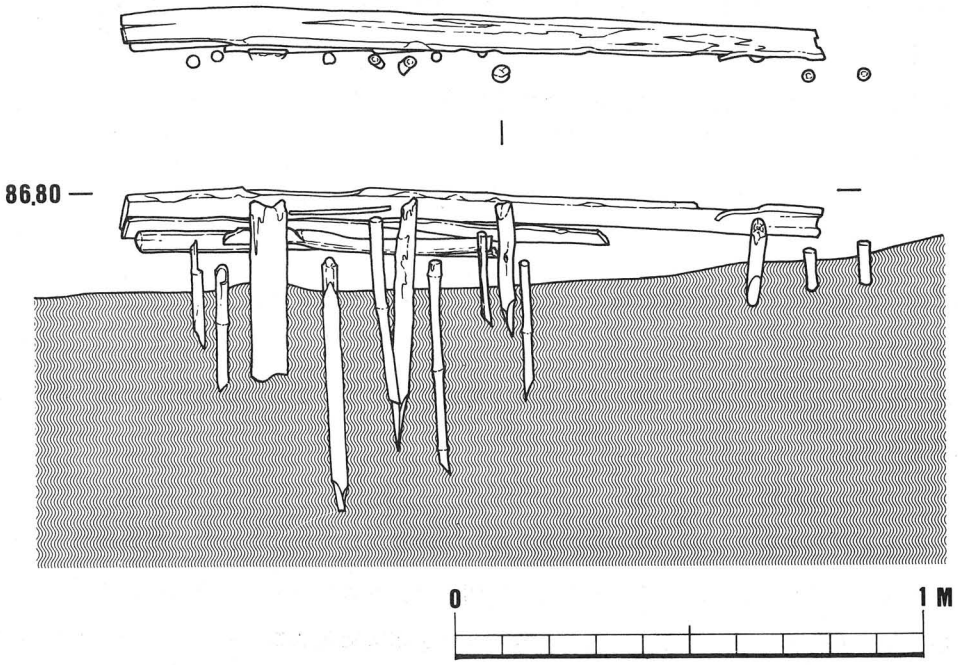
方形の土坑である。黒灰褐色砂質土の浅いレンズ状堆積をなす。

ＳＤ３（図３・４・10）

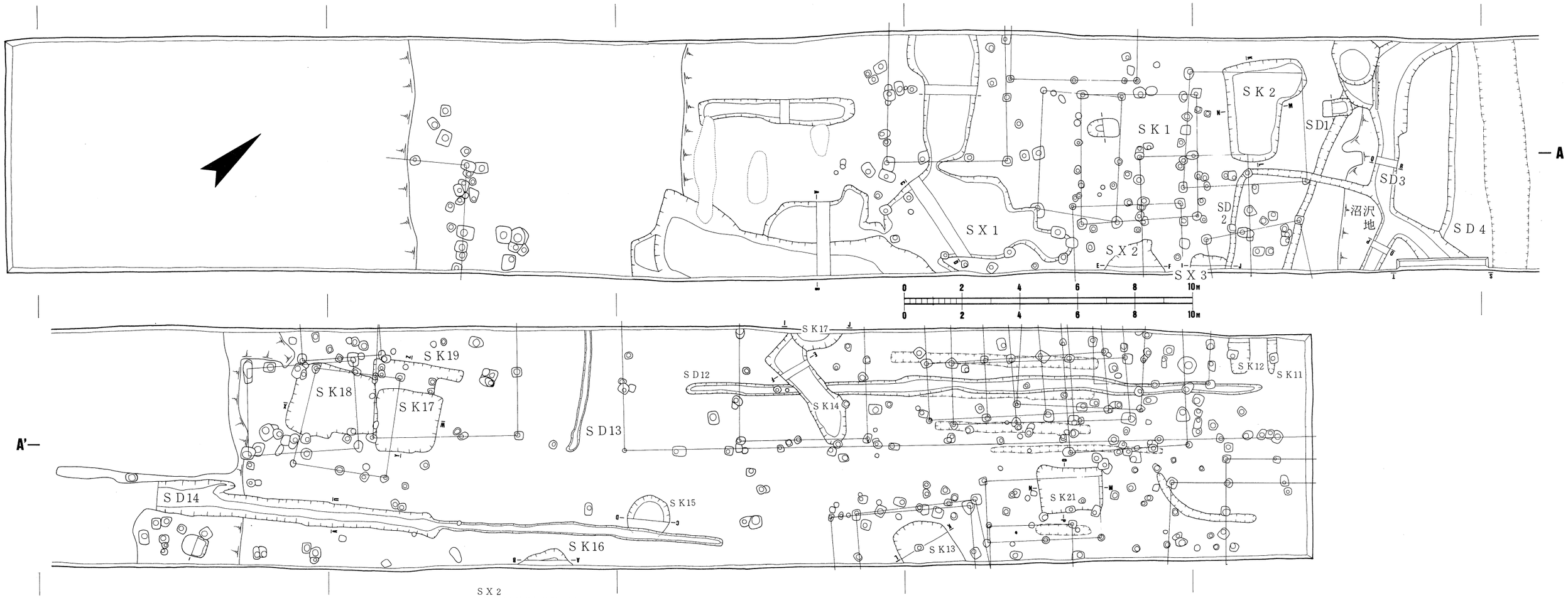
沼沢地が埋没した段階で、東南から北西方向に蛇行しながら流れる溝である。南側では２つの流れに分岐する。又、西側では、隣接する土坑との関連か溝肩の崩落を防ぐための護岸施設（図３）が施されている。横位に配した板材や丸太を、矢板・丸杭・竹杭等を打ち込んで固定している。溝は椀状の横断面を呈し、３層の覆土が判別される。①層は黒褐色粘質土、②層は黒灰褐色粘質土、③層は黒灰色泥土層よりなる。溝内より、黒色土器椀（Ｂ01・Ｂ02）、土師質中皿（Ｅ04）、受口状を呈する土師質甕（Ｅ05）、土師質羽釜（Ｅ06～Ｅ08）、瓦質三足堝の脚部（Ｚ01）、瓦質火舎（Ｚ02）、須恵質鉢（Ｃ01・Ｃ02）、陶質片口鉢（Ｐ01）・鉢（Ｐ02・Ｐ03）、白磁椀（Ｗ01）、土錘（Ｅ09～Ｅ11）などが多様に出土している。黒色土器椀は粗雑な作り、退化した高台等から末期に近い製品と考えられる。土師質中皿はＡ３タイプ、土師質羽釜はＣ型式のものである。

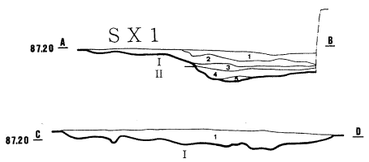
ＳＤ４（図４・10）

ＳＤ３の北側をほぼ平行して走る溝である。溝内より土師質羽釜（Ｅ12・Ｅ13）、陶質鉢（Ｐ04・Ｐ05）などが出土している。土師質羽釜はＣ型式のものである。



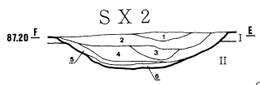
第３図．Ｓ１トレンチ、ＳＤ３護岸施設実測図

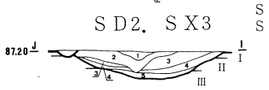




SX1
1．暗灰褐色砂質土層
2．黒灰褐色砂質土層
3．黄褐色砂質土層
4．黒灰色粘土層
5．灰褐色粘質土層

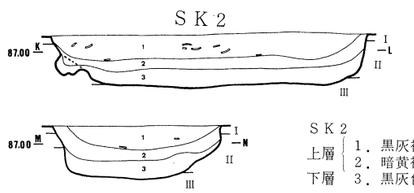
地山
Ⅰ．灰褐色砂質土層
Ⅱ．灰青色砂層
Ⅲ．灰褐色砂礫層



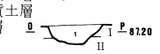


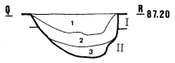
SX2
1．暗灰褐色砂質土層
2．黒灰褐色砂質土層
3．淡黒灰褐色砂質土層
4．暗黒灰褐色砂質土層
5．黄褐色粘質土層
6．黒灰色粘土層

SD2　黒灰褐色砂質土層
SX3
1．淡黒灰褐色砂質土層
2．暗灰褐色砂層
3．黒灰褐色砂質土層
4．暗黒灰褐色砂質土層
5．黒灰色粘土層

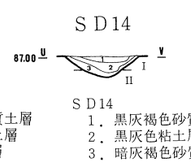


SK2
上層 1．黒灰褐色粘質土層
2．暗黄褐色粘土層
下層 3．黒灰色泥土層

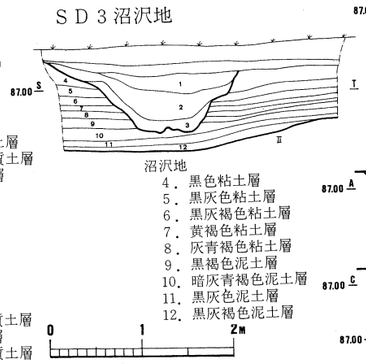




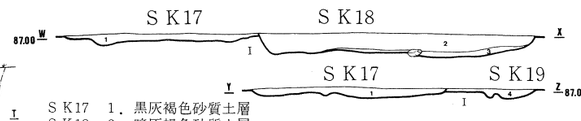
SD3
1．黒褐色粘質土層
2．黒灰褐色粘質土層
3．黒灰色泥土層



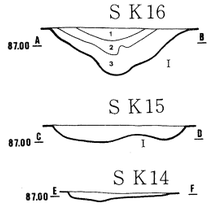
SD14
1．黒灰褐色砂質土層
2．黒灰色粘土層
3．暗灰褐色砂質土層



沼沢地
4．黒色粘土層
5．黒灰色粘土層
6．黒灰褐色粘土層
7．黄褐色粘土層
8．灰青褐色粘土層
9．黒褐色泥土層
10．暗灰青褐色泥土層
11．黒灰色泥土層
12．黒灰褐色泥土層

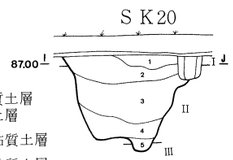


SK17　1．黒灰褐色砂質土層
SK18　2．暗灰褐色砂質土層
3．黒灰色泥土層
SK19　4．暗灰褐色砂質土層



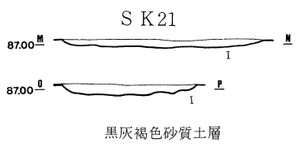
SK16
1．暗灰褐色
2．黄灰褐色粘質土層
3．黒灰褐色粘土層

SK15．暗灰褐色粘質土層
SK14．黒灰褐色砂質土層



SK14
1．黒灰褐色粘土層
2．黒灰褐色粘土と灰褐色砂質土のブロック
3．灰褐色粘土と黄褐色粘土と灰褐色砂質土のブロック
4．黒灰色粘土と灰褐色粘土のブロック
5．黒灰色泥土層

SK13　黒灰褐色砂質土層



黒灰褐色砂質土層

第４図．Ｓ１トレンチ遺構図

ＳＤ12（図４・10）

現行条里にそって、北東から南西に走る溝である。黒灰褐色砂質土の浅いレンズ状堆積をなす。土錘１点（E03）が出土している。

ＳＤ13（図４・10）

ＳＤ12に直交するように、北西から南東に走る溝である。黒灰褐色砂質土の浅いレンズ状堆積をなす。土師質中皿１点（E01）が出土している。Ａ２タイプのものである。

ＳＤ14（図４・10）

現行条里にそって北東から南西に向かって流れ、沼沢地で開口していたものと考えられる。地山Ｉ層より切り込まれ、地山II層の灰青砂層中に底部を置く。底部は椀状を呈し、深さ25cmを計る。覆土は、①黒灰褐色砂質土層、②黒灰色粘土層、③暗灰褐色砂質土層が順次堆積を重ねて埋没している。層内より瓦質火舎（Z01）と土錘（E04）の各１点が出土している。

ＳＸ１（図４・図10）

不定形ながらＴ字形に近い形状に大きくよどんだ落ち込みである。地山Ｉ層の灰褐色砂質土層より切り込まれ、地山II層の灰青色砂層中に底部を置く。層内には、①暗灰褐色砂質土層、②黒灰褐色砂質土層、③黄褐色砂質土層、④黒灰色粘土層、⑤灰褐色粘質土層が順次堆積を重ねており、層中より土師質小皿（E02）、陶質鉢（P01・P02）が出土している。小皿はＡ３タイプのものである。

ＳＸ２（図４）

壁面からわずかに顔をみせる落ち込みである。地山Ｉ層の灰褐色砂質土層より切り込まれ、地山II層の灰青色砂層中に底部を置く。層中には①暗灰褐色砂質土層、②黒灰褐色砂質土層、③淡黒灰褐色砂質土層、④暗黒灰褐色砂質土層、⑤黄褐色粘質土層、⑥黒灰色粘土層が順次堆積を重ねて埋没している。

ＳＸ３（図４）

壁面からＳＤ２に切られる形でわずかに姿をみせる落ち込みである。地山Ｉ層の灰褐色砂質土層より切り込まれ、地山III層の灰褐色砂礫層中に底部を置く。層内には①淡黒灰褐色砂質土層、②暗灰褐色砂層、③黒灰褐色砂質土層、④暗黒灰褐色砂質土層、⑤黒灰色粘土層が順次堆積を重ねて埋没している。

沼沢地（図４）

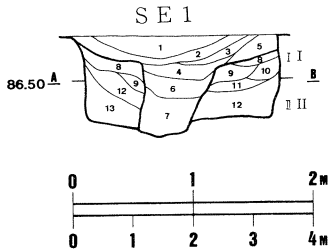
幅15m前後で、南東から北西方向によどむ沼沢地である。最深部で１ｍ余を計り、９層が薄く層状に堆積している。堆積土は、④黒色粘土層、⑤黒灰色粘土層、⑥黒灰褐色粘土層、⑦黄褐色粘土層、⑧灰青褐色粘土層、⑨黒褐色泥土層、⑩暗灰青褐色泥土層、⑪黒灰色泥土層、⑫黒灰褐色泥土層よりなる。

Ｓ２トレンチ（図６）

S12トレンチとＳ３トレンチの間に設定した、８ｍ四方の試掘的なトレンチである。当地は大きくレベルが下がり、常時湧水を伴なうような地であり、遺構の存在は余り期待してはいなかった。ところが耕土層、床土層を順次削平すると、灰青色砂層の地山を切り込んで１基の土坑が検出された。黒褐色粘土で覆われており、円形素掘りの井戸であった可能性が考えられる。

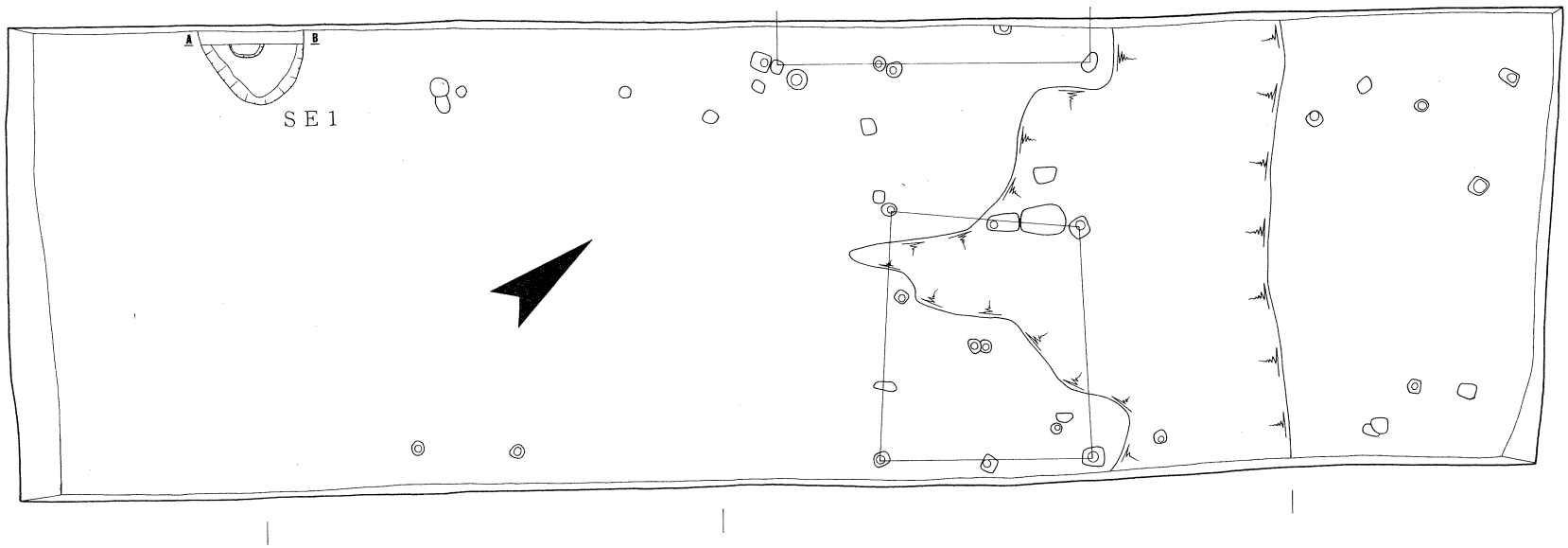
Ｓ３トレンチ（図５・11）

Ｓ区の南西端、Ｓ２トレンチとはクリークを隔てた最も低い地点に位置している。幹線水路部にそって、巾



SE1
1．暗黒褐色砂質土層
2．淡黒灰褐色粘質土層
3．黒灰褐色粘質土層
4．暗灰褐色粘土層
5．淡黒褐色粘土層
6．黒灰色泥土層
7．暗灰青褐色泥土層
8．淡黒灰色粘土層
9．灰褐色粘土層
10．淡黒灰色粘土層
11．灰青褐色粘土層
12．黒褐色泥土層
13．灰青褐色泥土層

地山
I．灰褐色砂質土層
II．灰青色砂層



第5図．S3トレンチ遺構図

10m、長さ50mのトレンチを設定した。

調査の結果、耕土層、床土層を順次削平すると、灰褐色砂質土層からなる地山が露呈し、この地山を切り込んで掘立柱建物、井戸、沼沢地などが検出された。

掘立柱建物（図５）

現行条里にそって、小規模な建物が数棟検出された。柱穴掘り方には黒灰褐色粘土が、又柱穴内には黒褐色粘土が充塡されている。掘立柱建物はＳＥ１を境にしてその南西側には認められないようである。柱穴内より、黒色土器埦（Ｂ01～Ｂ04）、土師質中皿（Ｅ07・Ｅ08）、土師質土錘（Ｅ05・Ｅ06）などが出土している。土師質中皿はＡ３タイプのもので、２例とも口縁端部外面に押しナデが施されている。

ＳＥＩ（図５・11）

トレンチ西端で検出した井戸である。地山Ｉ層の灰褐色砂質土層より切り込んで、地山II層の灰青色砂層中にその底部を置く。地山II層は湧水を伴なう砂層である。井戸には、径 1.6mの円形の掘り方のほぼ中央に、径 0.6mの井側の痕跡が認められる。おそらく、当初は曲物が井側として組み込まれていたのであろう。井戸の類型からいうと、円形曲物型木組井戸である。

井側および井側上面には、①暗黒褐色砂質土層、②淡黒灰褐色粘質土層、③黒灰褐色粘質土層、④暗灰褐色粘土層、⑤淡黒褐色粘土層、⑥黒灰色泥土層、⑦暗灰青褐色泥土層が順次堆積しており、又、掘り方内には、⑧淡黒灰色粘土層、⑨灰褐色粘土層、⑩淡黒灰褐色粘土層、⑪灰青褐色粘土層、⑫黒褐色泥土層、⑬灰青褐色泥土層が充塡されていた。井側内より、黒色土器埦（Ｂ05）、土師質中皿（Ｅ09）、須恵質片口鉢（Ｃ01）などが出土している。

Ｓ５トレンチ（図６）

支線水路部にそって、幅４ｍ、長さ10mのトレンチを設定した。耕土層、床土層を順次削平すると、灰褐色粘質土からなる地山が露呈し、この地山を切り込んで１条の溝が検出された。黒褐色粘土の浅いレンズ堆積をなしており、上部にMnO_2の沈着が認められる。

Ｓ７トレンチ（図６）

Ｓ５トレンチ同様、支線水路部にそって、幅４ｍ、長さ10mのトレンチを設定した。耕土層、床土層を削平すると、灰褐色粘質土からなる地山が露呈し、１条の溝が検出された。溝は北西から南東方向の流路を保っている。黒褐色粘土の埦状堆積が認められ、上部にMnO_2の沈着が著しい。

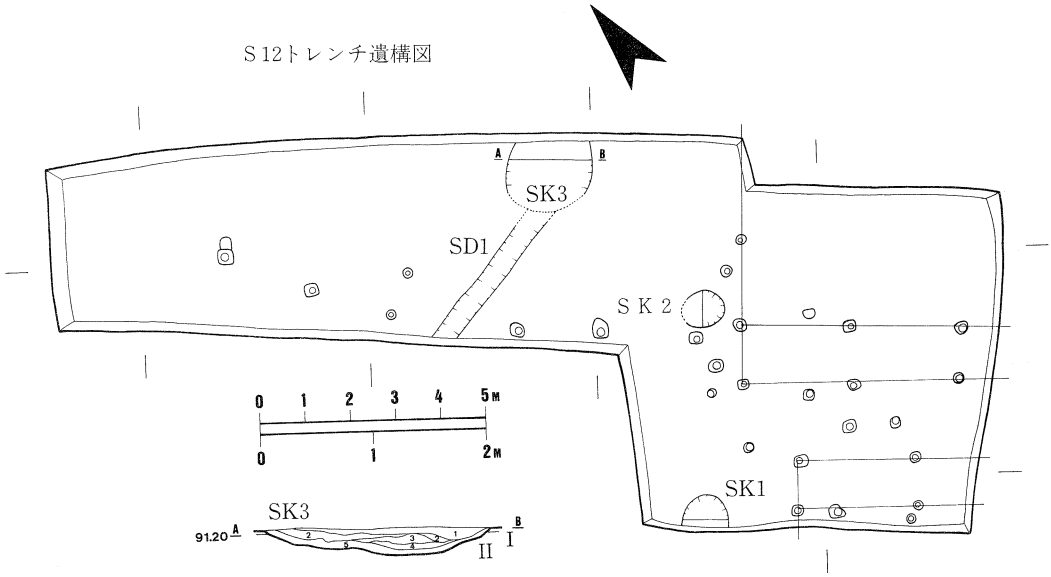
Ｓ12トレンチ（図６・11）

Ｓ１トレンチのすぐ南西側に、Ｓ１トレンチに直交するように設定したトレンチである。当地一帯には造園用の植樹が行なわれており、その土壌を削平すると、灰褐色砂質土からなる地山が露呈した。この地山を切り込んで、掘立柱建物や土坑・溝などが検出された。

掘立柱建物（図６・11）

現行条里にそって掘立柱建物が２棟確認できた。両棟とも相対するように廂を有しており、又、南東―北西方向に半間のずれが認められる。柱穴内より土師質小皿１点（Ｅ12）が出土している。

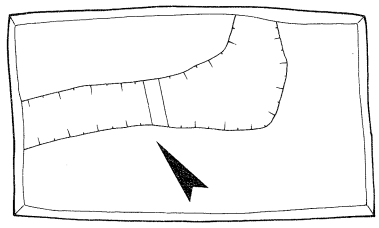
S12トレンチ遺構図



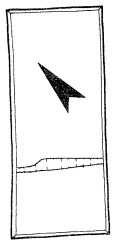
地山
Ⅰ．灰褐色砂質土層
Ⅱ．灰青色砂層

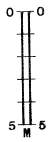
SK3
1．黒灰褐色粘質土層
2．暗灰褐色砂層
3．暗黒灰褐色粘質土層
4．灰褐色砂層
5．黒褐色粘土層

S16トレンチ遺構図

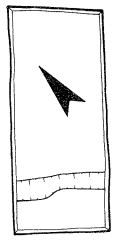


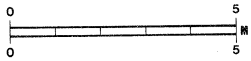
S5トレンチ遺構図



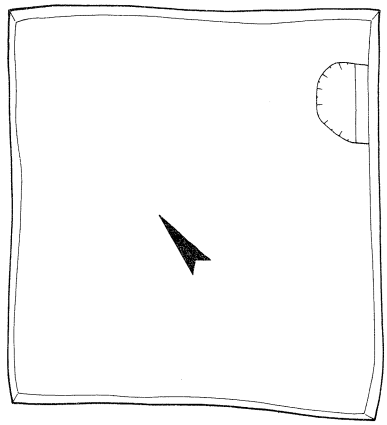


S7トレンチ遺構図





S2トレンチ遺構図



第6図．S2・S6・S7・S12・S16各トレンチ遺構図

ＳＫ１・ＳＫ２・ＳＫ３（図６・11）

いずれも円形を呈する土坑である。ＳＫ１・ＳＫ２は黒灰褐色粘質土の浅いレンズ状堆積を示している。ＳＫ３は、同じくレンズ状堆積だが、①黒灰褐色粘質土層、②暗灰褐色砂層、③暗黒灰褐色粘質土層、④灰褐色砂層、⑤黒褐色粘土層の５層が識別される。ＳＫ１より瓦質三足堝の脚部片（Ｚ01）が出土している。

Ｓ16トレンチ（図６・11）

Ｓ１トレンチと北東のクリークの間に設定した試掘トレンチである。調査の結果、トレンチ内でＬ字状に曲折する溝１条を検出した。溝幅は１ｍ余を計り、溝内は暗灰褐色砂質土の単純層によって覆われている。層内より黒色土器椀（Ｂ06～Ｂ08）、須恵器杯身（Ｃ02）などが出土している。なお、当地は旧来沼沢地であったと考えられ、地山は黒色粘土によって形成されている。沼沢地埋没後、溝が掘開されたと考えられる。

Ｔ　　区

Ｔ６トレンチ（図７）

当トレンチは、これまでの調査の結果、現赤野井集落方向に広大に広がる微高地の西端近くに位置していると予想される。耕土及び床土を順次削平した結果、その直下に灰褐色粘質土からなる地山が広がっていた。この地山は全体にモザイク状の攪乱を受けており、遺構の遺存状況は良好とは言い難い。検出した遺構は土坑と柱穴からなり、トレンチの北東辺に集中している。土坑は３基確認しており、１辺１ｍ前後の隅丸方形プランを呈している。柱穴は１辺30cm程度の方形の掘り方のものを２例確認している。いずれの遺構も黒褐色粘質土の単純層によって覆われており、層中より遺物の出土はなかった。

Ｔ10トレンチ（図７・11）

幹線水路部にそって、幅10ｍ、長さ70ｍ余のトレンチを設定した。トレンチの南西側には、すぐ守山川の流れがあり、又、周辺一帯には低平地が広がっている。当地のわずかな微高地を利用して、以下の遺構が構築されたものと考えられる。

調査の結果、耕土層、床土層を順次削平すると、灰褐色砂質土層（一部粘質化）からなる地山が露呈し、掘立柱建物・土坑・溝などが検出された。遺構の広がりは、トレンチ内の特に北西側に集中する傾向にある。

掘立柱建物（図７・11）

12棟の掘立柱建物を確認した。いずれの建物も、若干の振幅が認められるものの、野洲郡条里Ｎ－34°－Ｅの方位がすでに意識されている。建物の中には２間×３間の倉庫と考えられる総柱建物１棟が存在する他、３間×４間の掘り方のしっかりした建物、１間×２間のやや貧弱な建物など、建物の状況は多様である。又、それらを画す施設も認められない。柱穴内より須恵器坏身４点（Ｃ03～Ｃ06）が出土している。

ＳＫ１（図７・11）

2.7ｍ× 1.4ｍの隅丸方形を呈する土坑である。黒灰褐色粘土の浅い皿状堆積をなす。層内より、土師器の中型甕（Ｅ10）、坏身（Ｅ11・Ｅ13・Ｅ14）、須恵器の坏身（Ｃ07・Ｃ08・Ｃ11）が出土している。

ＳＫ2（図７）

2.0ｍ× 0.4ｍの溝状の土坑である。黒灰褐色粘質土の浅いレンズ状堆積をなす。

ＳＫ３（図７・11）

8.4m× 1.2mの細長い溝状土坑である。黒灰褐色粘質土の浅いレンズ状堆積をなす。須恵器坏身２点（Ｃ09・Ｃ10）が出土している。

ＳＫ４（図７）

守山川の堤防による攪乱のため過半を消失しており全様は不明だが、ＳＫ３同様細長い溝状土坑になるものと思われる。黒灰褐色粘質土の埦状堆積をなす。

ＳＫ５（図７）

ピットを２つ連結したような隅丸方形の土坑である。上層に黒灰色粘土、下層に黒褐色粘土が充塡されている。

ＳＤ１（図７）

西から東へ弧状に流れる溝である。幅 1.4m前後、深さ 0.4m余を計る。断面は埦状を呈しており、①暗黒褐色粘質土と地山Ｉ（灰褐色砂質土）のブロック状混入層、②暗黒褐色粘質土層、③黒褐色粘質土層、④黒灰色粘土層の４層が識別される。地山Ｉより切り込まれて、地山Ⅲの灰褐色粘土層中に底部を置く。

ＳＤ２（図７）

南西から北東への直線的な流路を保つ溝である。幅 0.5m、深さ 0.2mを計る。断面はＵ字状を呈し、①黒色粘土層、②黒褐色砂質土層、③黒褐色砂質土と地山Ｉの混入層の３層が識別される。地山Ｉより切り込まれ、地山Ⅱの黒褐色腐蝕土層中に底部を置く。

ＳＤ３（図７）

Ｌ字状に屈曲する溝である。幅 0.7m、深さ 0.5mを計る。断面はＵ字状を呈し、①暗灰褐色粘土層、②地山Ⅱのブロック状混入層の２層よりなる。地山Ｉより切り込まれて、地山Ⅲ中に底部を置く。

Ｔ14トレンチ（図７）

Ｔ14は幅３ｍ、長さ 100mの狭長なトレンチである。耕土及び床土層を順次削平すると、灰褐色砂質土からなる地山が露呈し、地山を切り込んで沼沢地と溝が検出された。沼沢地は黒褐色泥土の浅い単純層からなり、わずかな低平地をぬうように広がっている。当地は現在の赤野井集落と杉江集落の中間に位置しており、かつては守山川とその支流が網状に流れ、周辺には小規模な後背湿地が点在していたと考えられる。今回検出した沼沢地も又、これらの後背湿地の一端であろう。

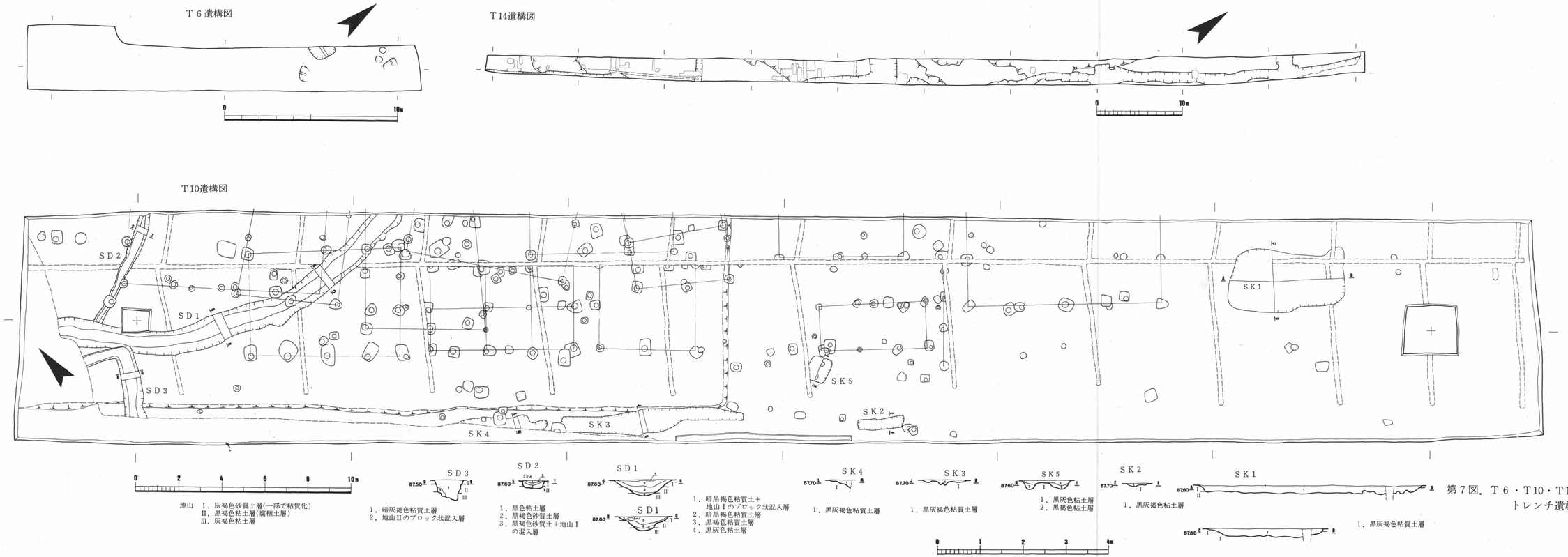
沼沢地埋没後、トレンチに平行ないし直交する溝が掘開される。トレンチに平行する溝は、やや蛇行しながらも、概ねＮ－34°－Ｅの方向にあり、２層の覆土が識別される。覆土上層は赤褐色砂礫層で、Fe_2O_3やMnO_2の沈着が著しく、近世の陶器細片をわずかに混入している。下層は黄褐色砂礫層である。又、直交する溝は、先の下層に類した砂礫層を基調とするが、全体に黒色を強める傾向にあり一部泥土化する箇所も認められる。トレンチの南東側には、トレンチにそって現行条里の畦が走っており、検出した平行する溝とセットになって坪境を形成していたものと考えられる。直交する溝は20m余のほぼ等間隔に４条を確認した。半折形の水田に伴なうものかもしれない。

注

① 大橋信弥「〝近江型〟黒色土器再考」『手原遺跡発掘調査報告書』栗東町教育委員会

② 横田洋三「出土土師皿編年試案」『平安京跡研究調査報告』第５輯．古代学協会

③ 稲垣晋也「法隆寺出土資料による土釜の編年」『大和文化研究』７－７



第7図. T6・T10・T14
トレンチ遺構図

3．お　わ　り　に

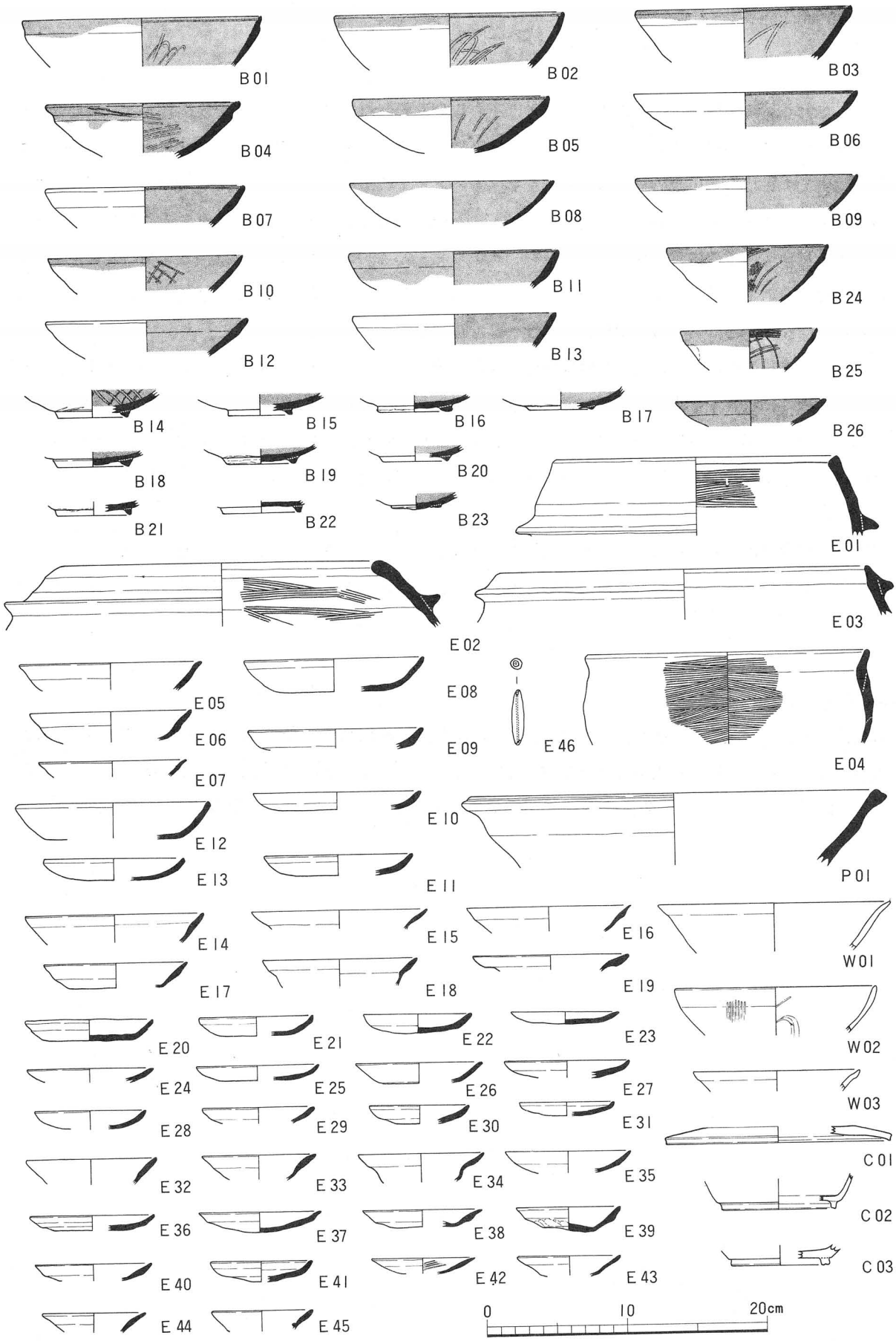
以上、赤野井遺跡Ｓ区・Ｔ区の調査について、その概要を記した。Ｔ10トレンチで検出した平安初期の遺構、Ｓ１トレンチ及びその周辺で検出した平安末から室町期の遺構は、先年杉江町北方で確認した中世遺構とともに、当地方での古代から中世の村落のあり方を示すものとして興味深い。Ｔ10トレンチで検出した平安初期の村落は、すぐ南西を守山川に画されており、Ｔ10トレンチ前後の長さを保ちながら北東方向に伸びるのであろう。Ｓ１トレンチ周辺の中世村落は、Ｓ１トレンチから北方約 200ｍ、南は山賀川に至るまでの総延長約 500ｍ間、河道や沼沢地、溝などによって分断されながら点在することが知られる。東へはＳ１トレンチより余り伸びることはなく、西はおそらく現杉江集落と一部重複するものと予想される。

なお、Ｓ１トレンチ北端で検出した倉庫跡は、周囲に柵がめぐって倉屋敷とも称すべき一画が形成されている。一方、柵外に蝟集する小規模な掘立柱建物群は、中世的小百姓の居住域と予想される。又、Ｓ12トレンチで検出した掘立柱建物２棟には廂が付されていた。先年、杉江町北方で検出した中世遺構にも、大型の掘立柱建物に廂がついており、それはさらにその外周に溝がめぐっていた。これらは、名主層の居住域と考えて良いのかもしれない。

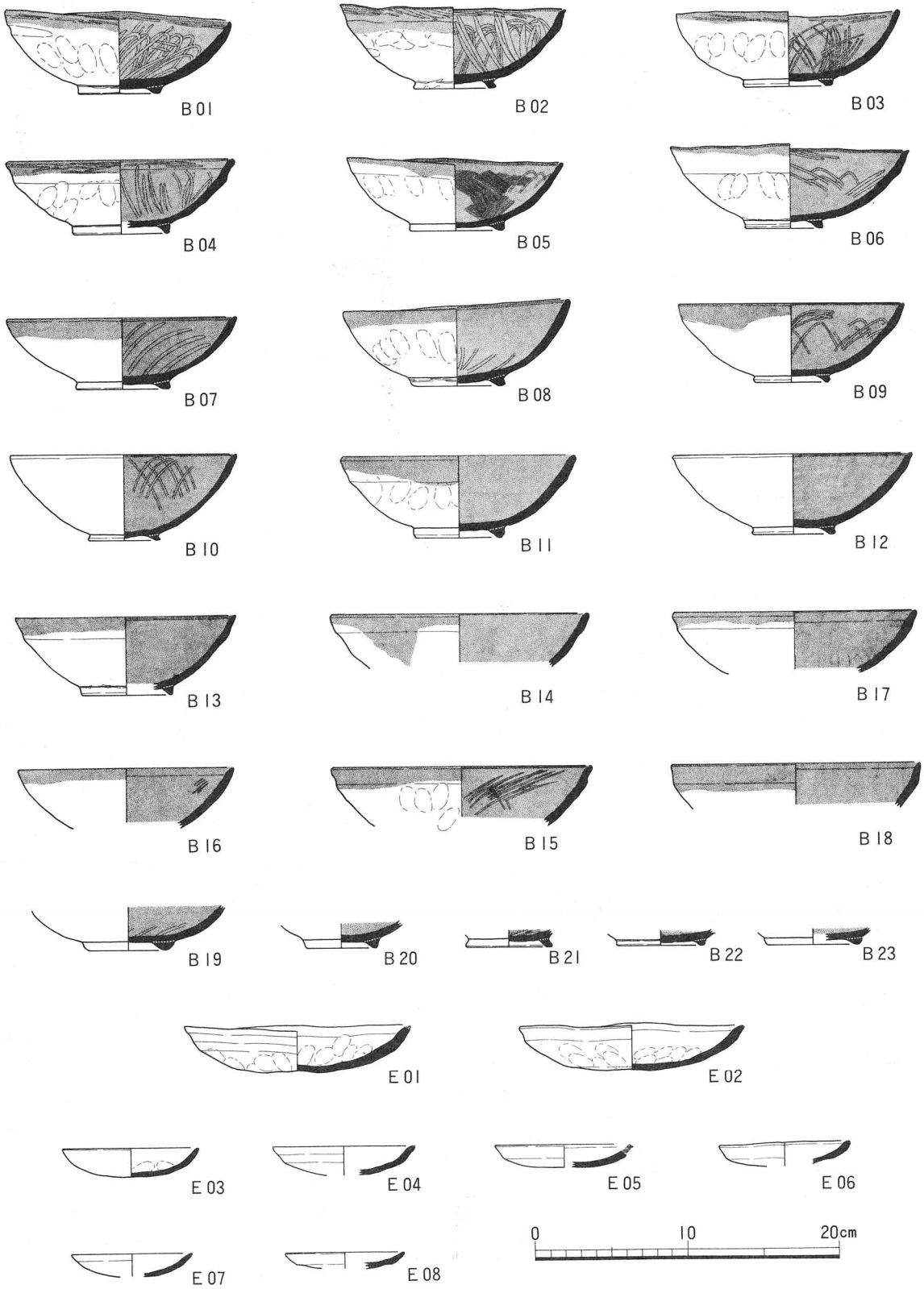
これまでの調査は、いずれもほ場整備事業に伴う狭長なトレンチ調査であり、中世村落の全様は明らかにすべくもないが、村落にあらわれた状況は多様である。今後、当地方の古代・中世村落を解明する一助となれば幸いである。

〔調査参加者〕

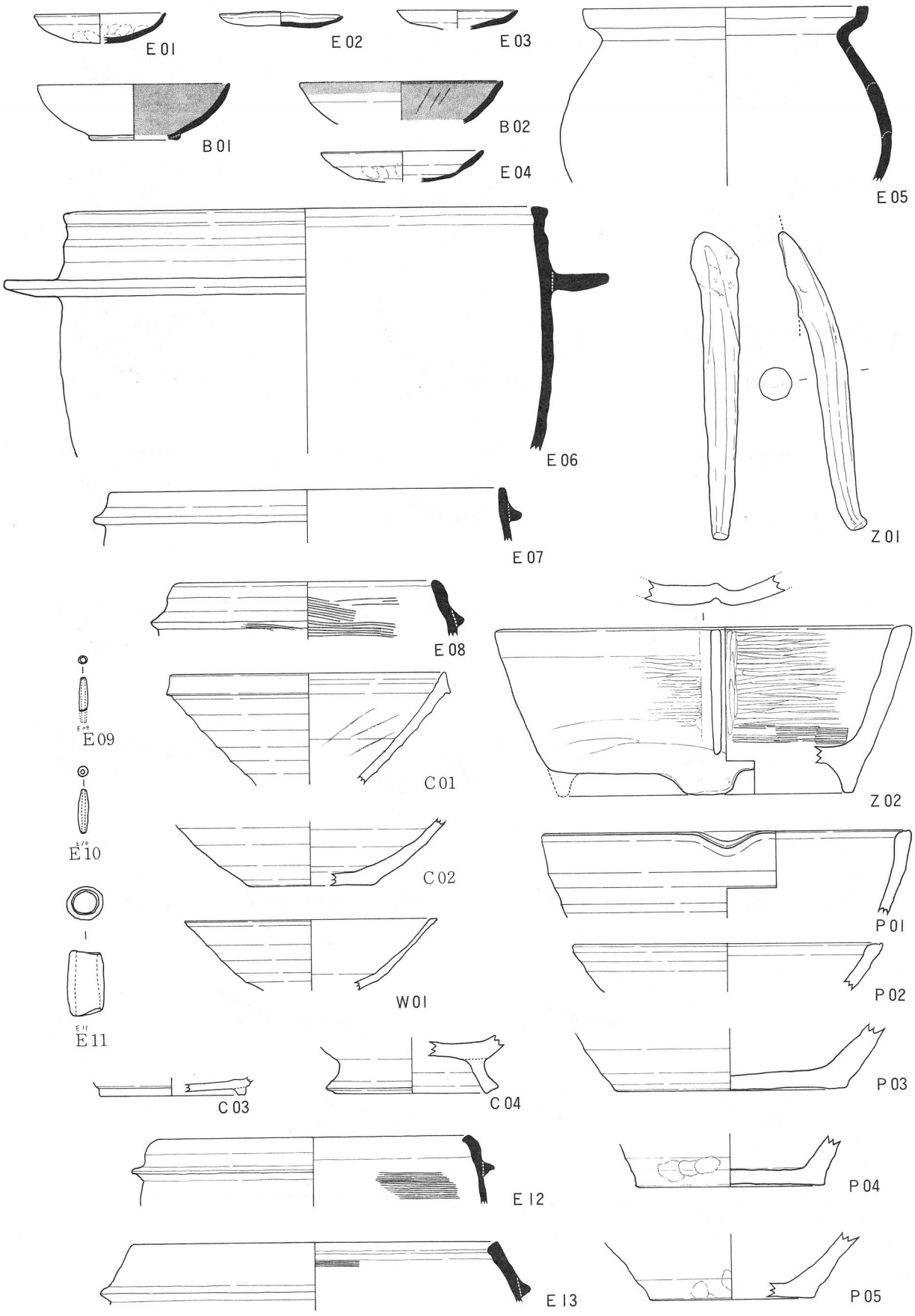
調査員　進藤　裕、調査補助員　北野隆司・上形徳行・角出裕資・浦谷昌章・玉井弘樹・筈井美博・南井安則・吉川与司一・北脇邦彦・松居正高・南　清章・田中英一・落盛　実・和田正嗣・高田康弘・高山雅一・田中　悟・加賀爪美子・川下晴美・田中玲子・北村則子・出湯広子・伊東恭子



第８図．Ｓ１トレンチ、掘立柱建物柱穴内出土土器実測図

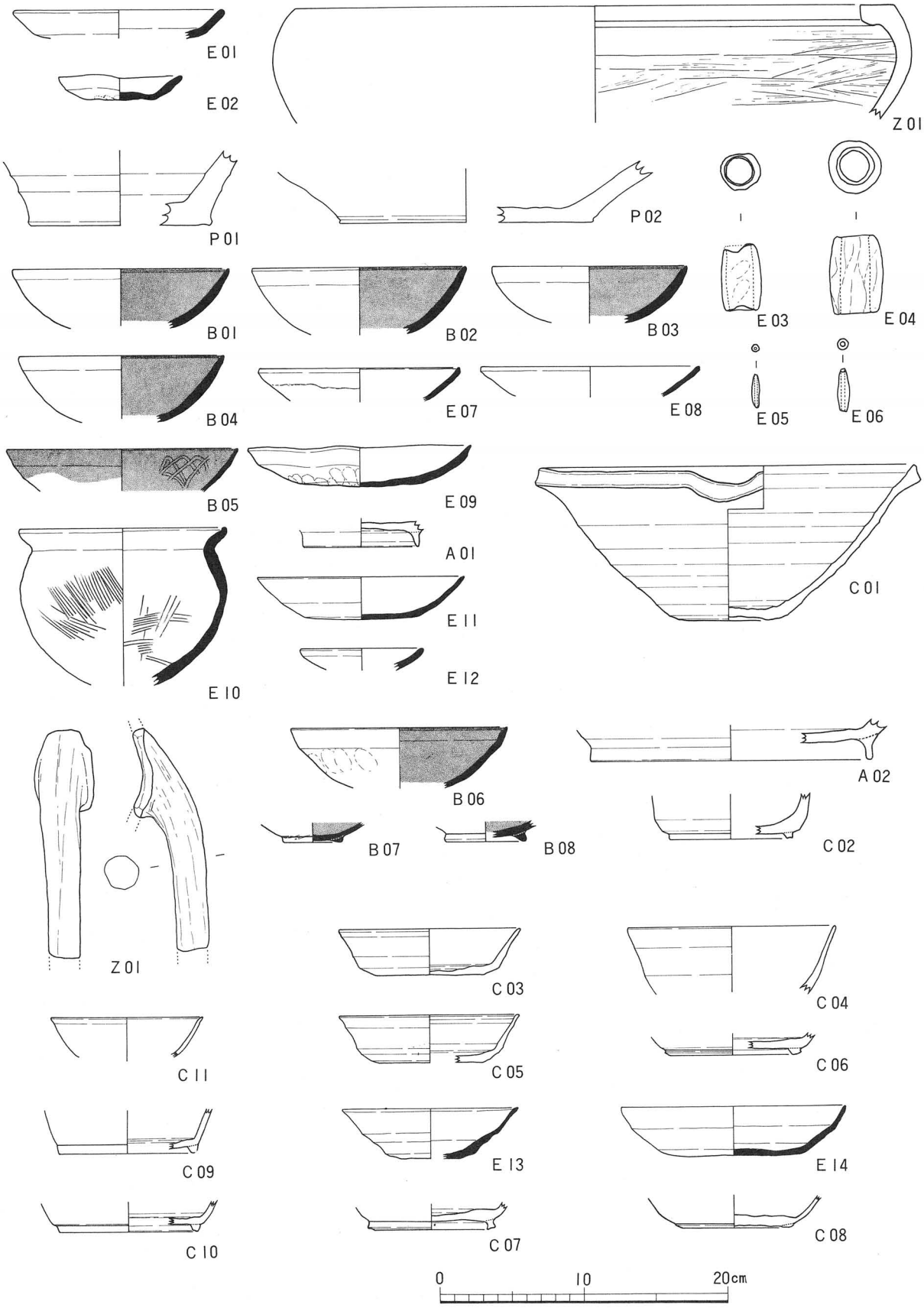


第９図．Ｓ１トレンチＳＫ２出土土器実測図（Ｂ01・Ｂ02のみ下層出土、その他は上層出土）



ＳＫ18（Ｅ01～03）・ＳＤ3（Ｂ01～02、
Ｅ04～Ｅ11、Ｚ01～02、Ｃ01～03、Ｐ01～03、
Ｗ01）ＳＤ４（Ｃ04、Ｅ12～13、Ｐ04～05）

第10図．Ｓ１トレンチ出土土器実測図



S1・SD12(E03)SD13(E01)SD14(E04・Z01)SX1(E02・P01・P02)
S3・掘立柱建物(B01～04・E05～08)SE1(B05・E09・A01・C01)
S12・掘立柱建物(E12)SK1(Z01)
S16・SD1(B06～08・A02・C02)
T10・掘立柱建物(C03～06)SK1(E10～11・E13～14・C07～08・C11)
SK3(C09～10)

第11図．S1・3・10・12・16トレンチ、T10トレンチ出土土器実測図

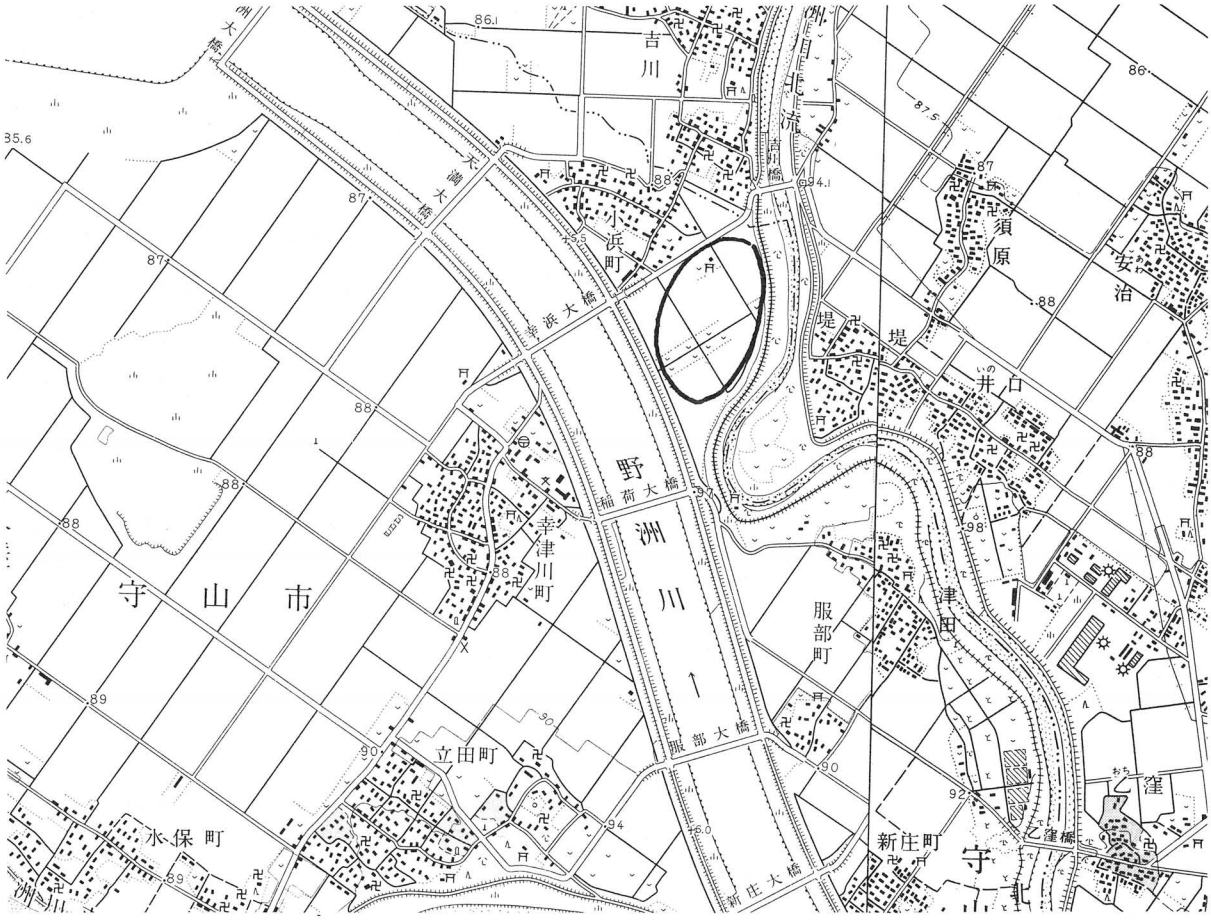
第２章　守山市小浜遺跡

1．は　じ　め　に

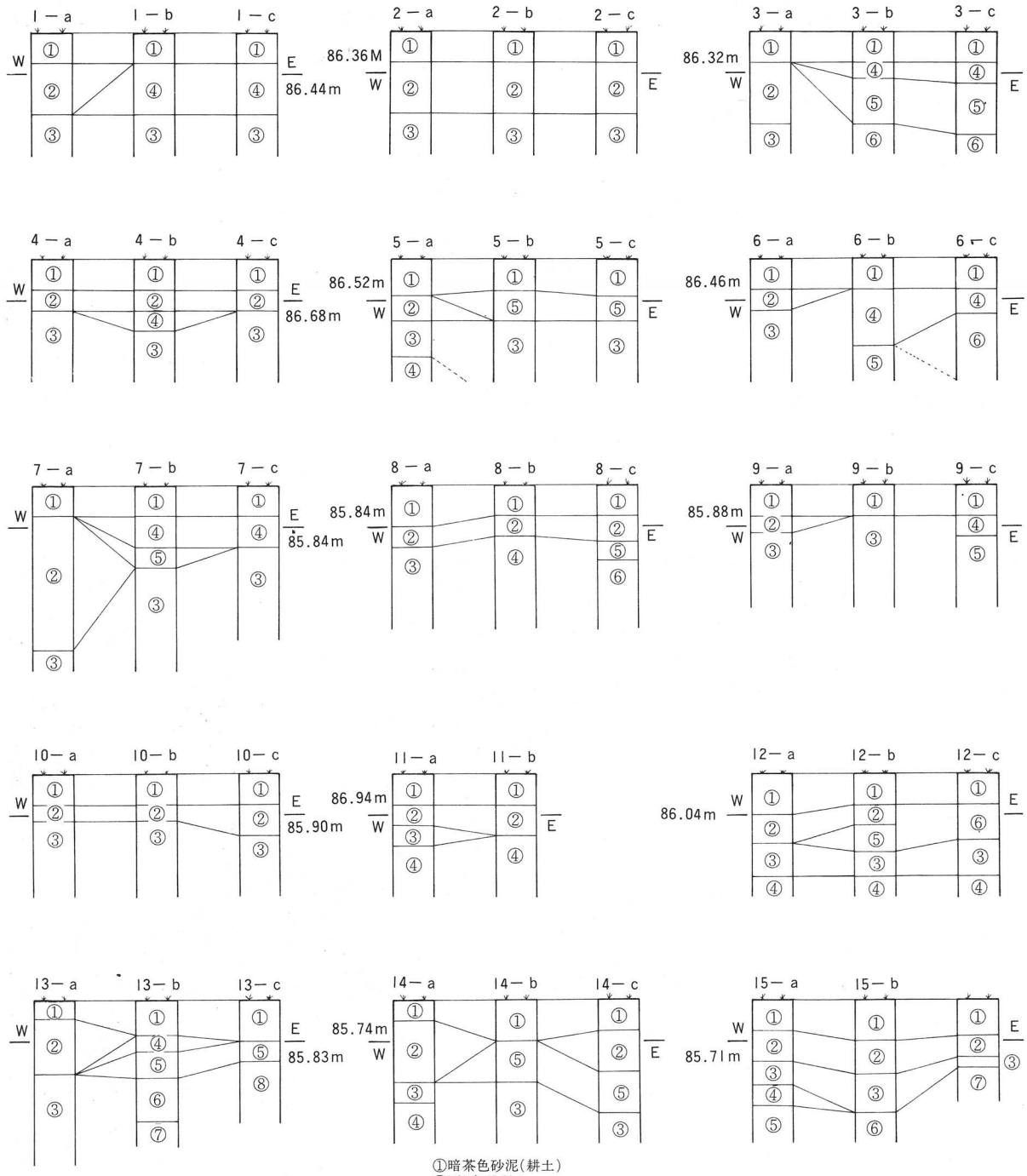
小浜遺跡は、従来未周知の遺跡であったが服部遺跡の東北端の確認を一つの目的として、今回試掘調査を実施することとした。調査地は、小浜集落の東、旧野洲川北流が大きく蛇行する、通称「稲荷前」の西北一帯を占める。この地の暗渠排水工事は、深さ約50～70cmであり、埋設予定地に幅１ｍ、長さ４ｍのトレンチを設定して、遺構の深さ、有無を把握するよう努めた。

2．調　査　結　果

試掘坑は、水田１枚に３ヶ所、合計 64 ヶ所に設置して、東から順次調査をすすめた。調査箇所の東側の過半では、耕土・床土を除去した段階で、黄褐色砂質土が、全面に広がっており、この地が、野洲川北流の氾濫原となっていたことが知られた。ただ、小浜集落に近い、西北端においては、遺構こそ検出されなかったが、深さ80～90cmで、中世の遺物を包含する層が、いくつかのトレンチで検出され、現集落と重複して、遺跡の存在することが明らかになった。ただし出土遺物は、いずれも小破片で、実測するには到らなかった。

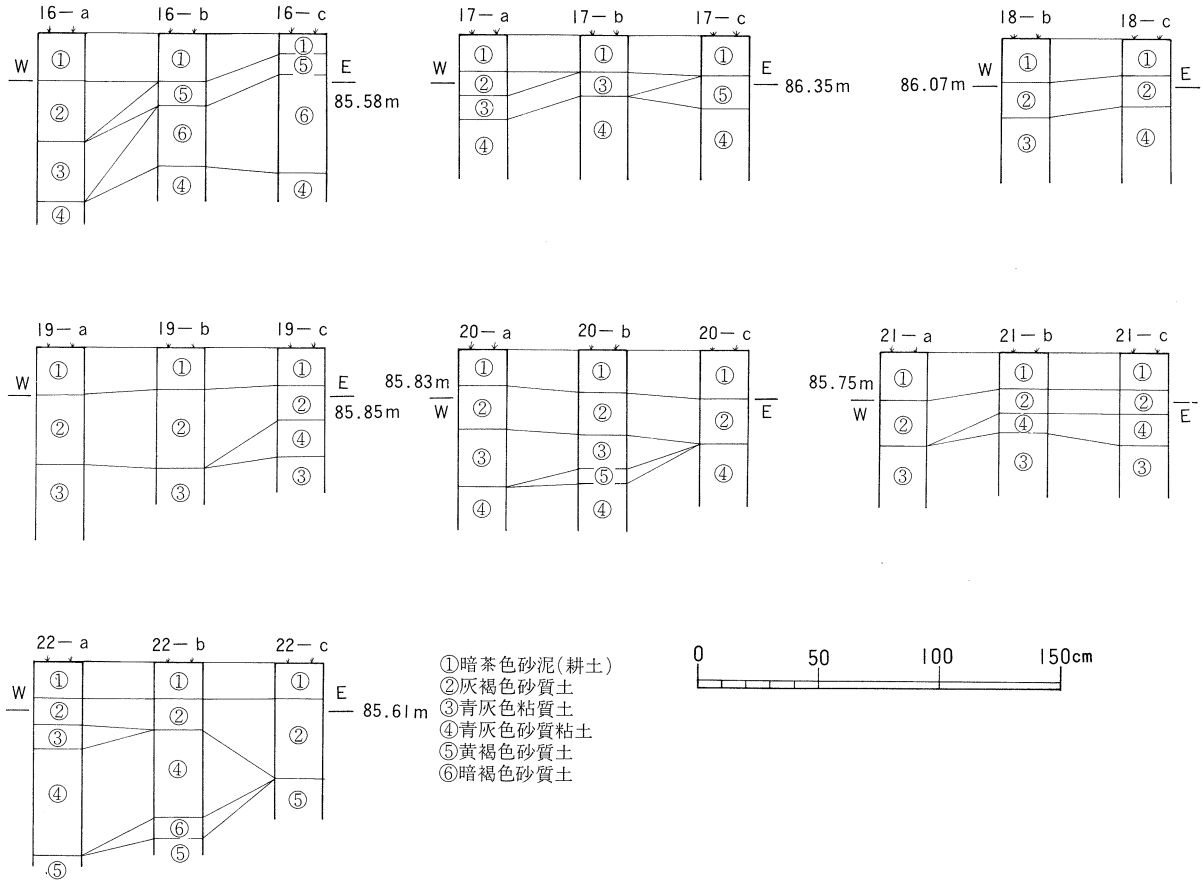


第12図．小浜遺跡位置図



第13図．小浜遺跡柱状断面図(1)

第14図．小浜遺跡トレンチ設定図



第15図．小浜遺跡柱状断面図(2)

3．ま　と　め

今回の調査は、きわめて限定されたものであったが、現小浜集落の東側において、遺物包含層を検出したことによって、従来未周知であった本遺跡の存在が明らかになり、合せて野洲川氾濫の様相の一部が明らかとなった。今後、この地域についても、遺跡保存が十分にはかられる必要があろう。

〔調査参加者〕

調査補助員　北野隆司・筈井美博・北脇邦彦・浦谷昌章・山本三良・山本恵理

第３章　守山市幸津川遺跡

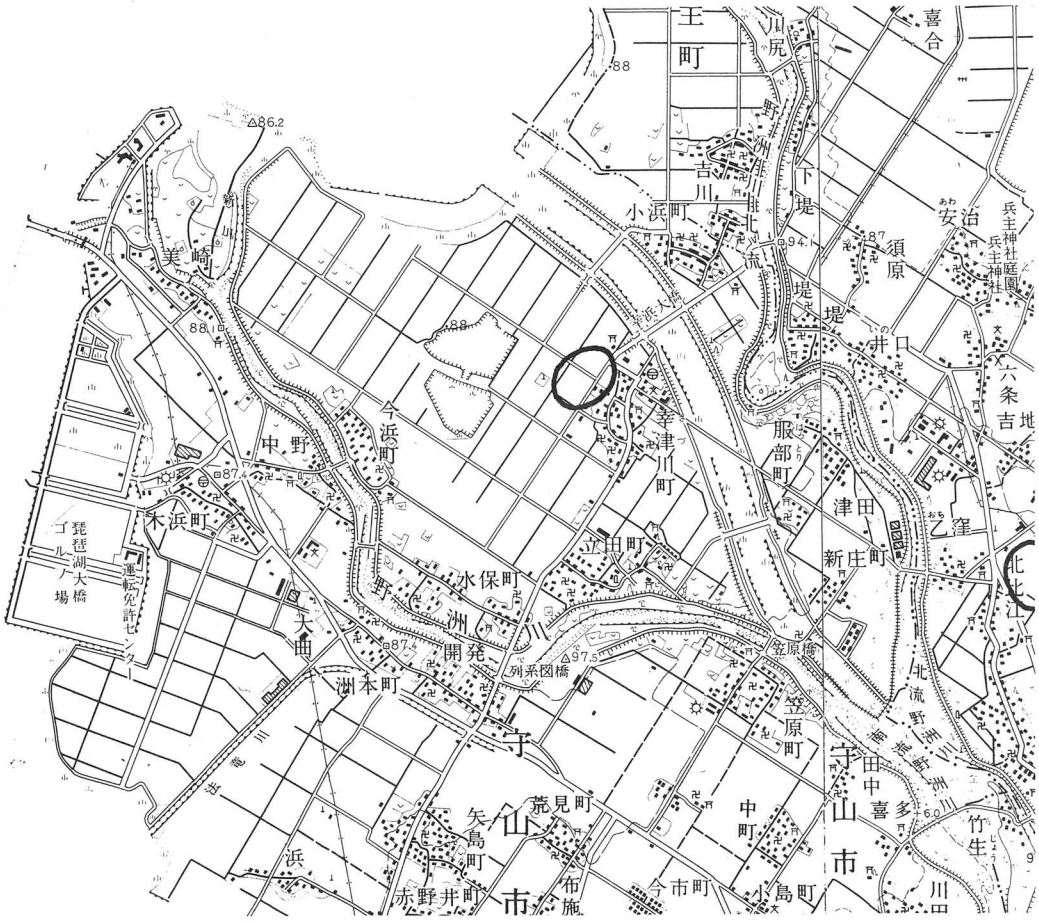
1．は　じ　め　に

幸津川遺跡は、守山市幸津川町の集落周辺一帯に所在しており、野洲川改修工事に先立って、一部の試掘がなされたのみで、その実態は、ほとんど明らかでなかった。今年度は幸津川集落の西側一帯において、暗渠排水工事が計画されたため、埋設部分の試掘調査を実施した。

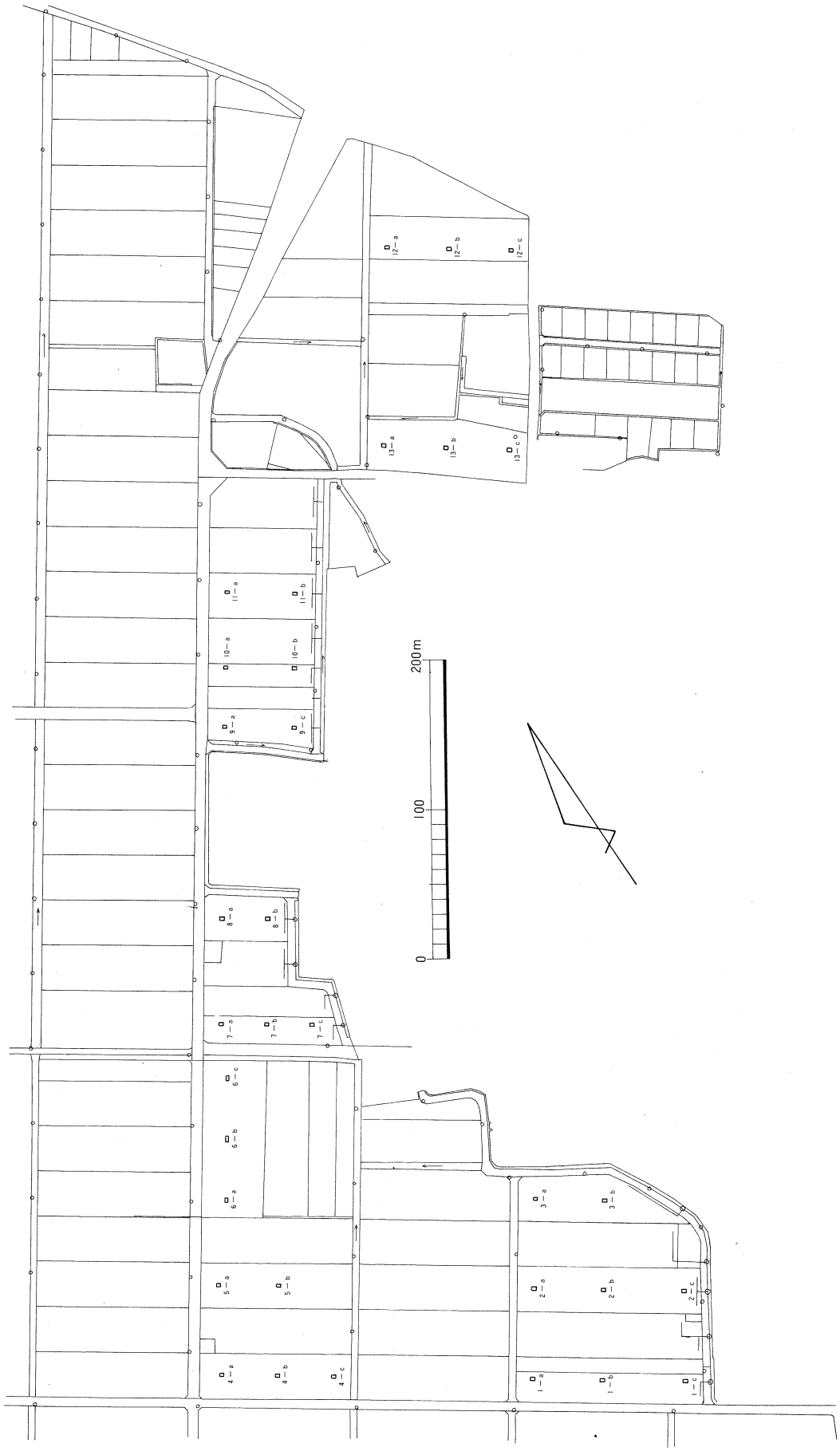
2．調　査　結　果

調査は、原則的に、遺構の有無、深さを確認することを目的として、暗渠埋設箇所に、幅１ｍ、長さ４ｍの試掘溝を、計32ヶ所設置して実施した。

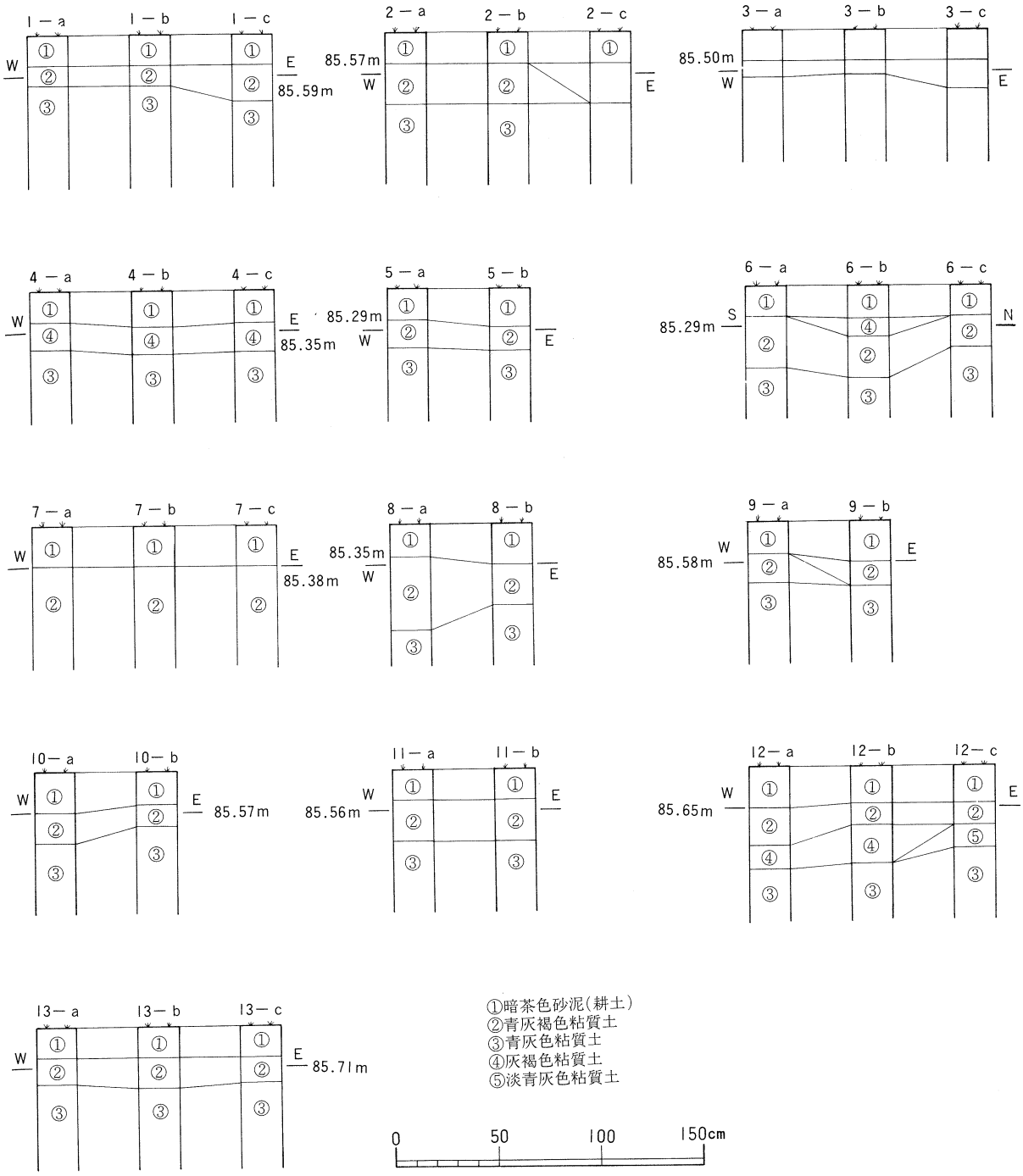
各トレンチとも、深さ１ｍ以内においては遺構・遺物の検出はなく、工事に支障のないことが判明した。この地域の層序は、耕土が約15cm、青灰色粘土層が15～20cm、以下青灰褐色砂質土が厚く堆積していた。



第16図．幸津川遺跡位置図



第17図．幸津川遺跡トレンチ設定図


1－a
1－b
1－c
W
E
85.59m
2－a
2－b
2－c
85.57m
W
E
3－a
3－b
3－c
85.50m
W
E
4－a
4－b
4－c
W
E
85.35m
5－a
5－b
85.29m
W
E
6－a
6－b
6－c
85.29m
S
N
7－a
7－b
7－c
W
E
85.38m
8－a
8－b
85.35m
W
E
9－a
9－b
85.58m
W
E
10－a
10－b
W
E
85.57m
11－a
11－b
W
85.56m
E
12－a
12－b
12－c
85.65m
W
E
13－a
13－b
13－c
W
E
85.71m
①暗茶色砂泥(耕土)
②青灰褐色粘質土
③青灰色粘質土
④灰褐色粘質土
⑤淡青灰色粘質土
0
50
100
150cm

3．ま　と　め

今回の調査は、きわめて限られたものであったため、特記すべき成果はなかったが、幸津川遺跡の範囲が、集落の西側にはほとんどのびないことが明らかになった。

〔調査参加者〕

角出裕資・玉井弘樹・吉川与司一・田中英一・奥村二朗・三上発代

第４章　守山市服部遺跡

1．は　じ　め　に

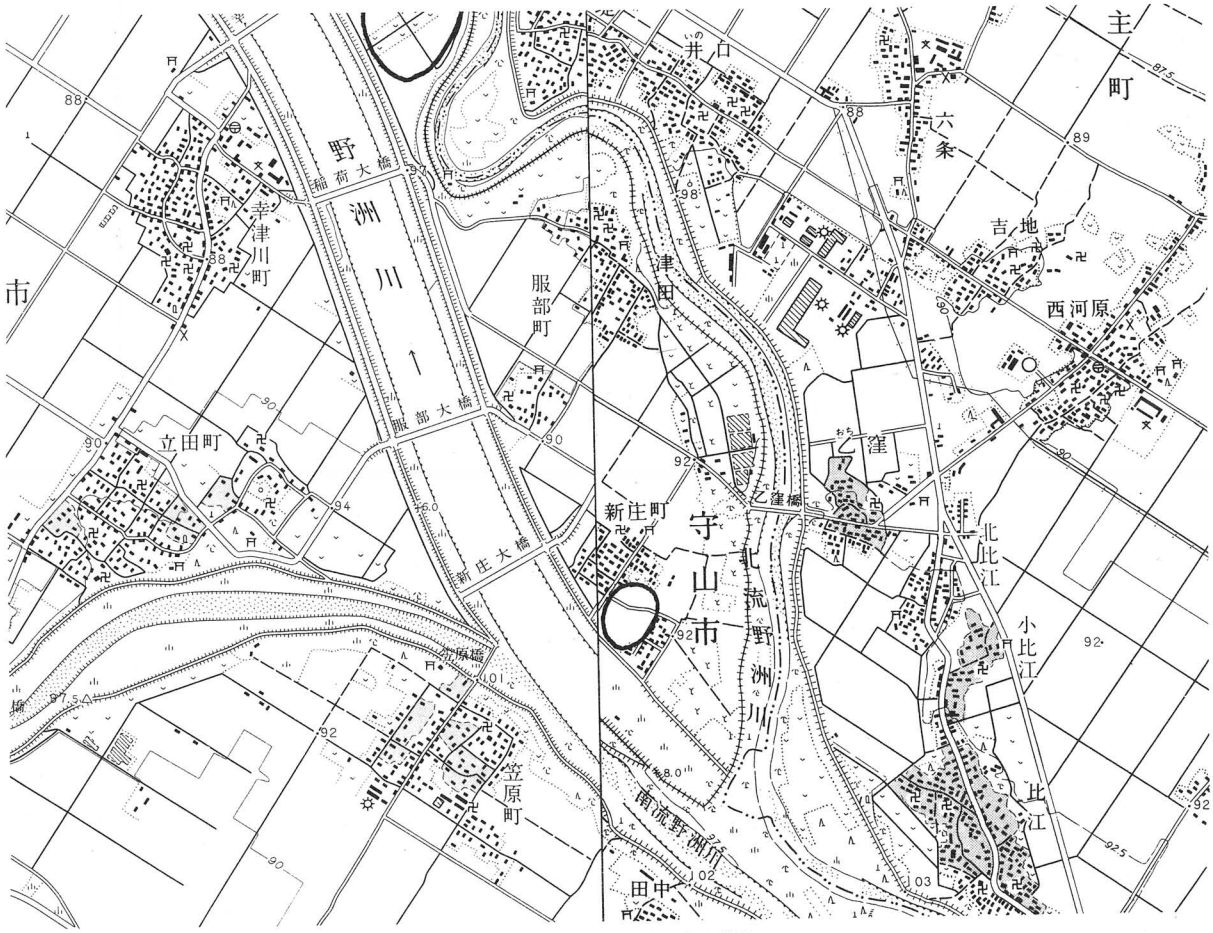
服部遺跡は、昭和49年、野洲川改修工事中に発見された大規模な遺跡で、五ヶ年を要して実施された発掘調査によって、縄文晩期から鎌倉時代に到る重複遺跡であることが明らかになった。この地域のほ場整備は、すでに野洲川改修事業に先立って完了していたが、ここ数年来、暗渠排水工事が改めて計画・実施されている。このため、従来は一部立会い調査を実施していたが、今年度は、一部試掘調査を実施することにした。

2．調　査　結　果

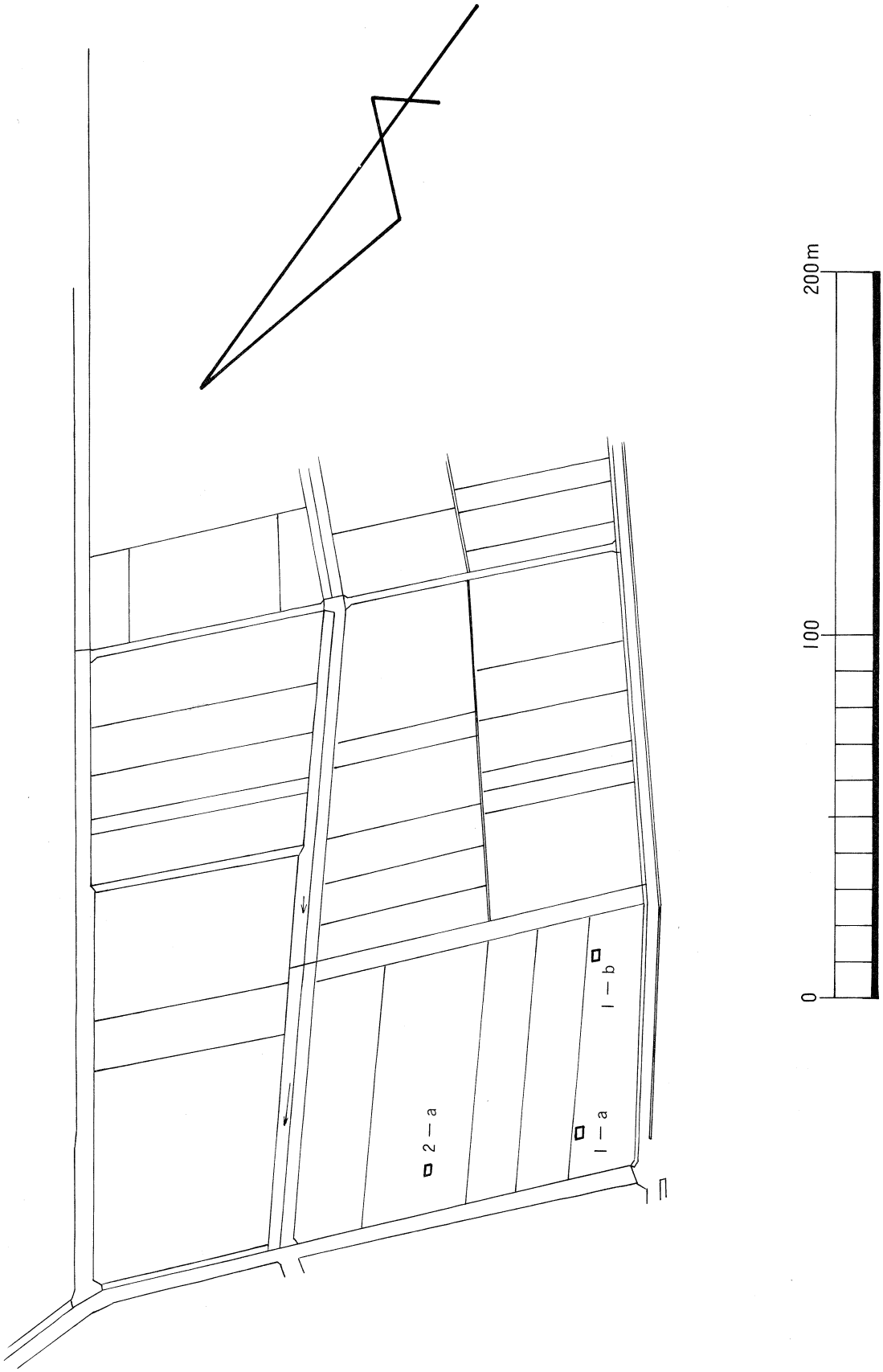
調査は、原則的に、遺構の存否、深さを確認することにとどめることとし、暗渠排水工事の実施される部分に、幅１ｍ、長さ４ｍの試掘坑を３ヶ所設定して、順次調査をすすめた。

今回は、工事計画の関連で、新庄地先の水田数枚のみが対象となったが、畑作等で、重機の使用が不可能であったため、計３ヶ所において、人力による調査を実施した。

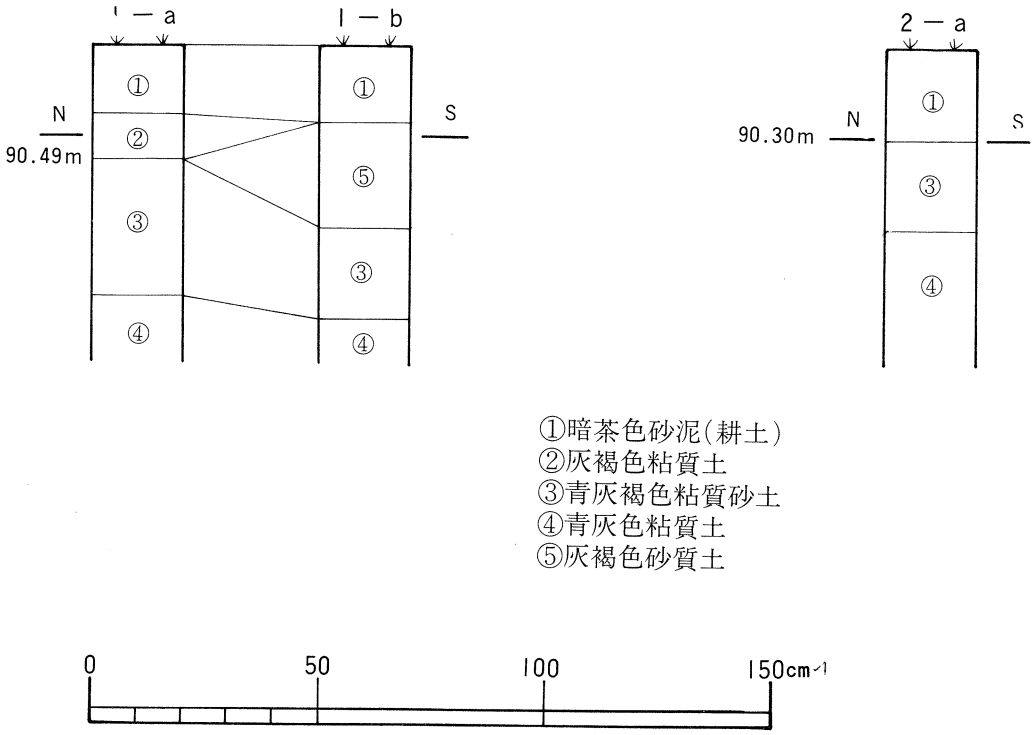
各試掘坑とも、地表下１ｍ以内においては、遺構・遺物の分布はなく、数枚の耕作面が認められるにすぎなかった。



第19図．服部遺跡位置図



第20図．服部遺跡トレンチ設定図



第21図．服部遺跡柱状断面図

3．ま　と　め

今回の調査は、きわめて限定されたものであったが、結果的には、この地域の遺構が、地表下１ｍ以下に所在することを、改めて検証することになった。服部遺跡の範囲は、さきの調査で、南北がほぼ確認されたが、東西については、依然不明であり、今後、範囲確認調査が必要となるであろう。

〔調査参加者〕

調査員　川立長司、調査補助員　北野隆司・田中英一・寺田雅彦・中山順子

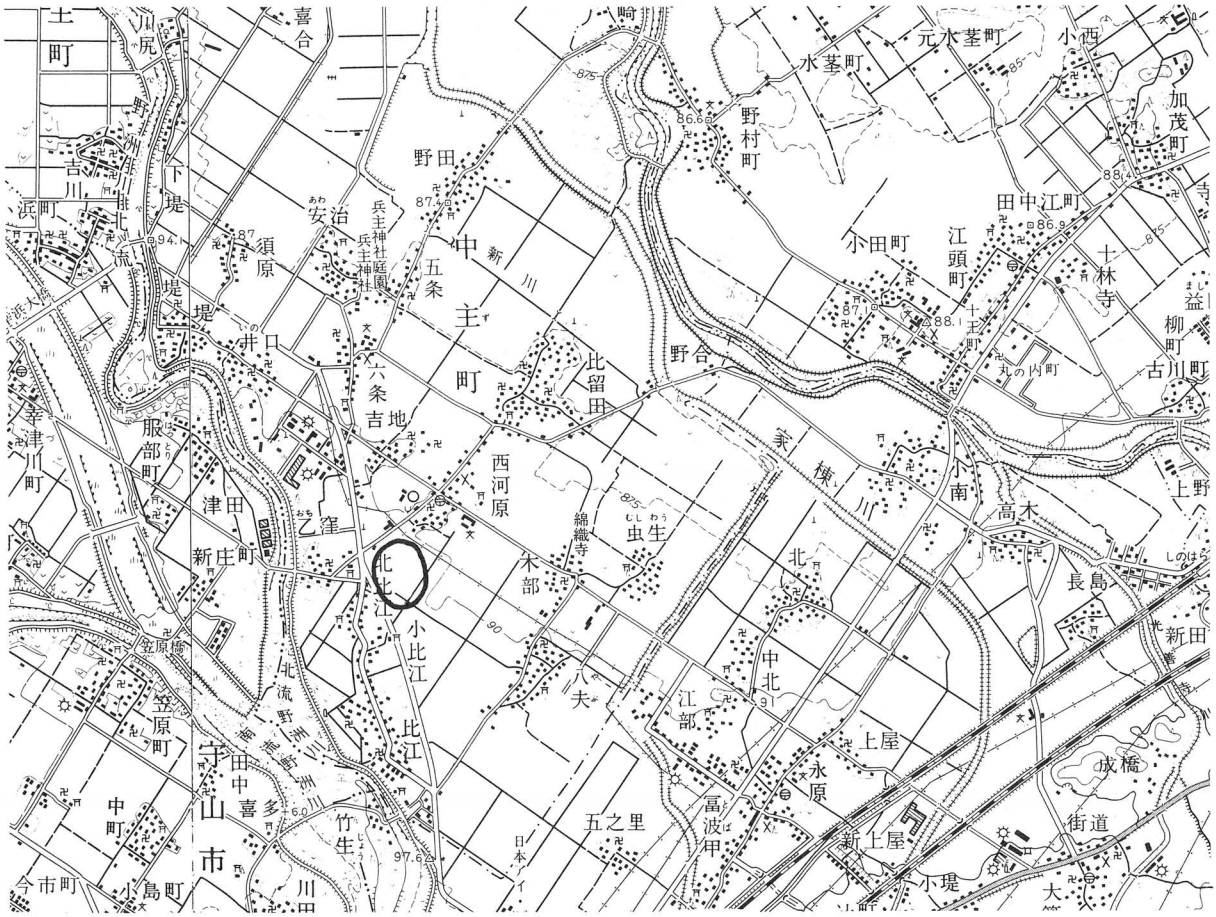
第５章　中主町八夫遺跡

1．は　じ　め　に

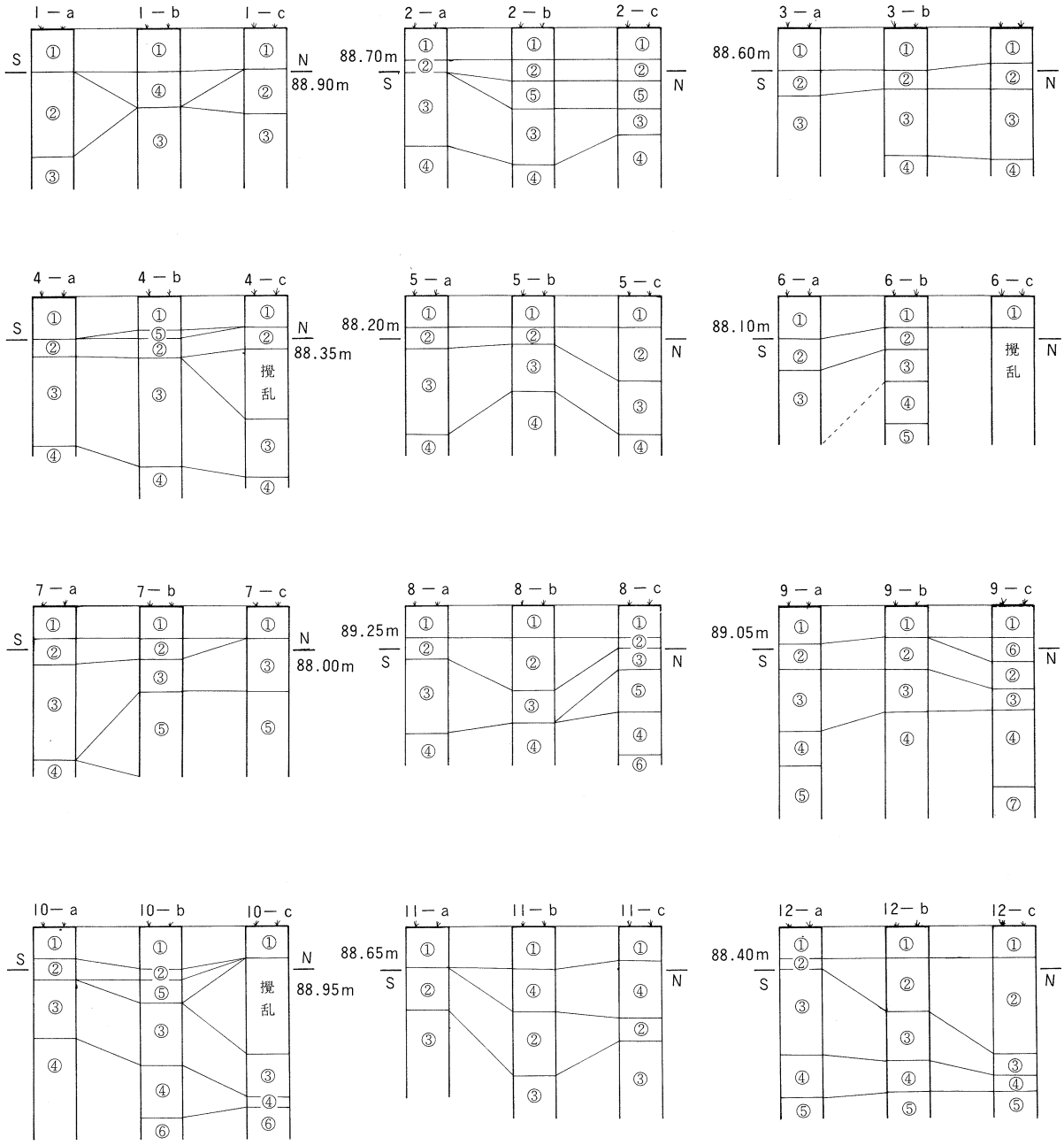
中主町におけるほ場整備事業は、昭和50年以前に大半が完了したため、遺跡調査は不十分で、工事完了後、何ヶ所かで、遺物の散布が報告された。今回、暗渠排水工事が計画される八夫地区についても、町教委の分布調査により、遺物の散布が指摘されていた。当調査地は、野洲川北流の右岸微高地と、八夫・虫生・木部などの集落をのせる微高地にはさまれた、低平地にあたる。調査は、遺構の有無、深さを把握することを主たる目的として、１×４ｍのトレンチを、埋設箇所に設定した。

2．調　査　結　課

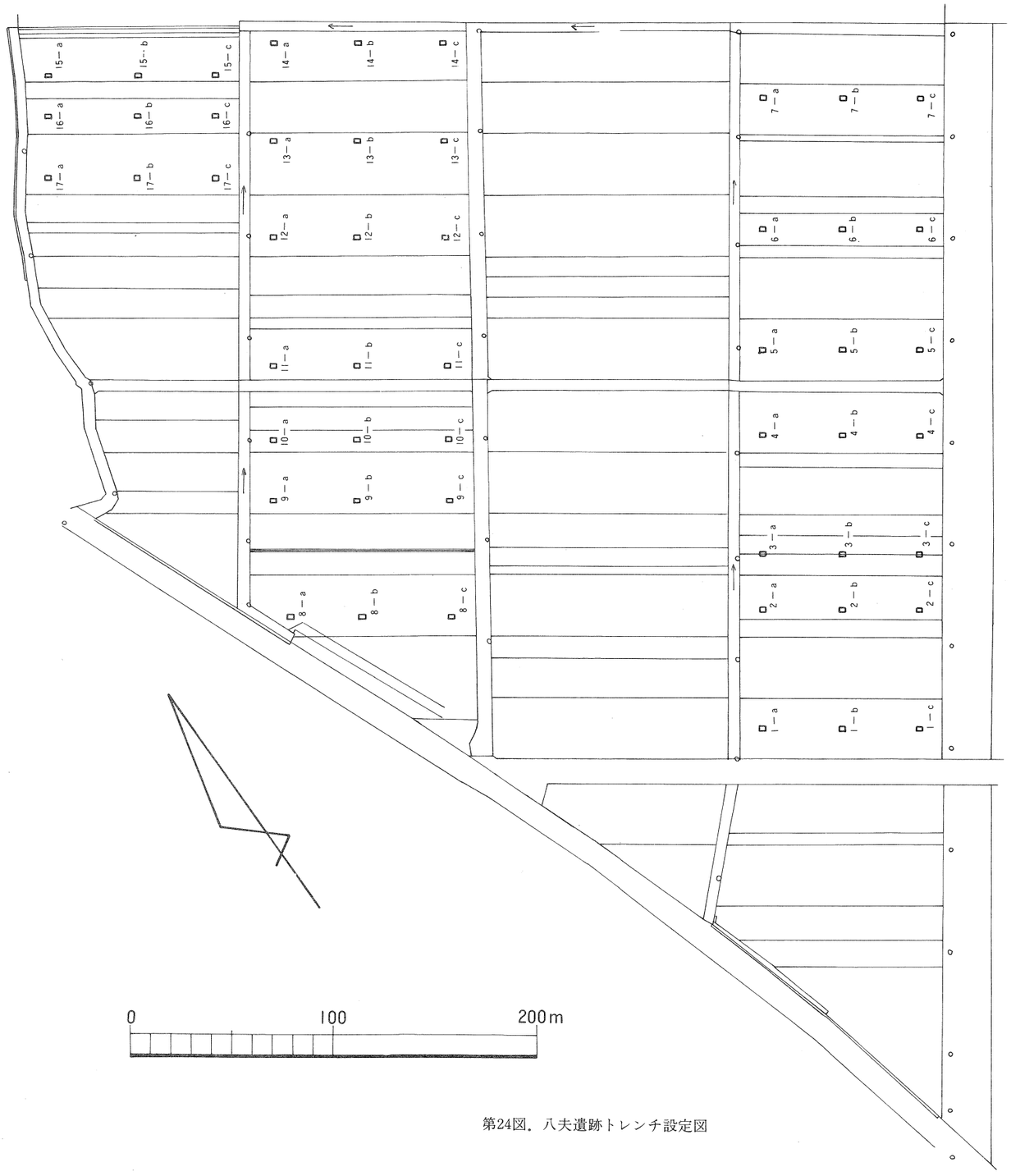
調査は、西から東へ順次すすめた。一部を除き、地表下１ｍ前後において、平安末～鎌倉期の遺物を包含する層が検出されるため、合計51ヶ所にトレンチを設定したが、遺構の検出はなかった。遺物も小破片で、一部磨滅しており、調査地の東側、現八夫集落周辺に遺跡の中心部があるとみられる。



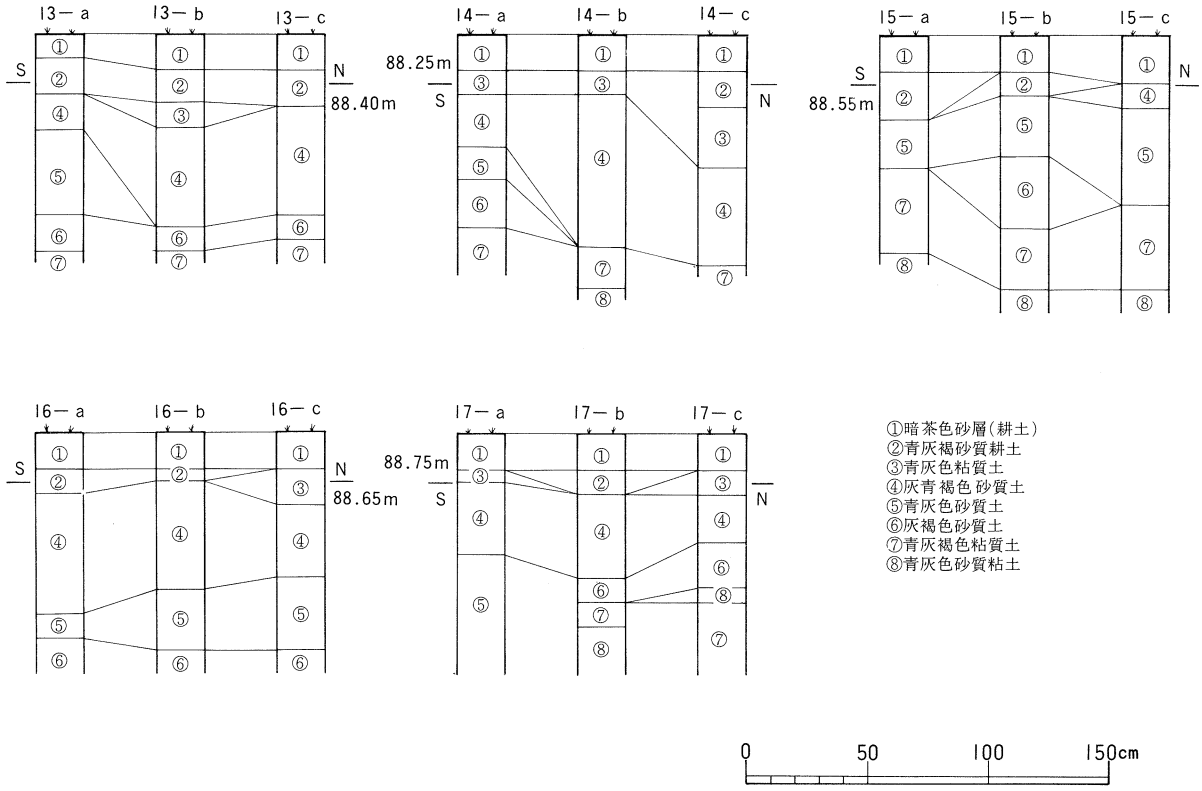
第22図．八夫遺跡位置図



第23図．八夫遺跡柱状断面図(1)



第24図．八夫遺跡トレンチ設定図



第25図．八夫遺跡柱状断面図(2)

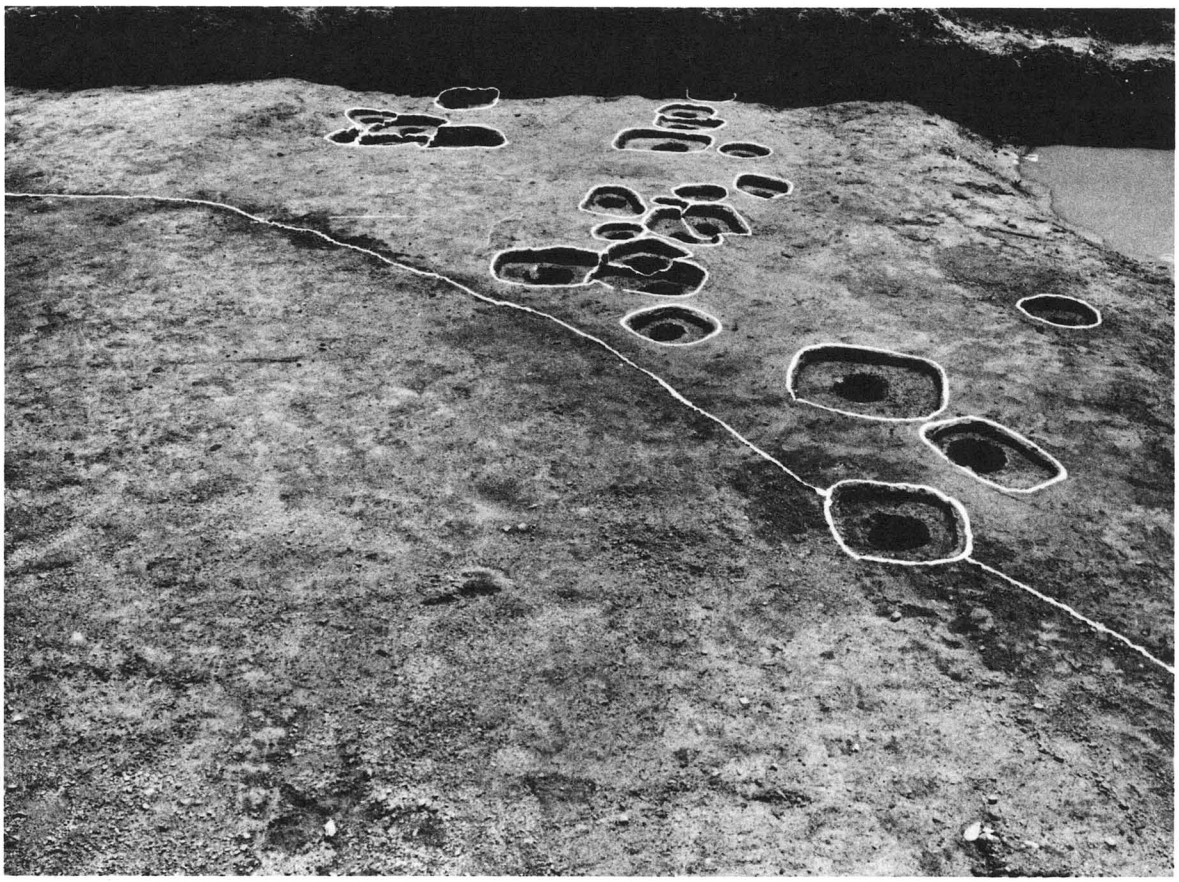
3．ま　と　め

今回の調査では、遺構の検出はなかったものの、トレンチの大部分で、遺物包含層を発見しており、当該地が、遺跡の周辺部であることが判明した。したがって、次年度以降の工事区については、十分な注意が必要となろう。

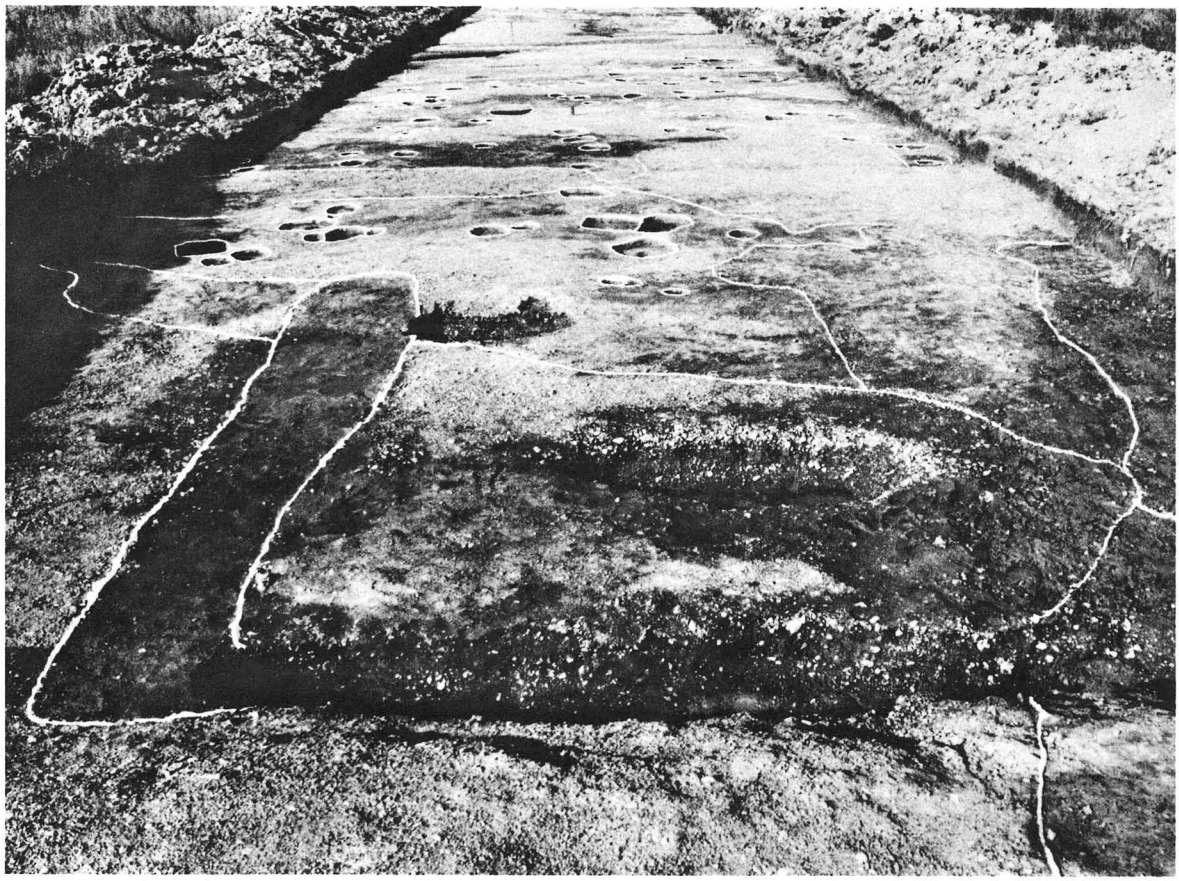
〔調査参加者〕

調査員　川立長司、調査補助員　北野隆司・林　伸次・玉井弘樹・北脇邦彦・野上　透・辰己邦子

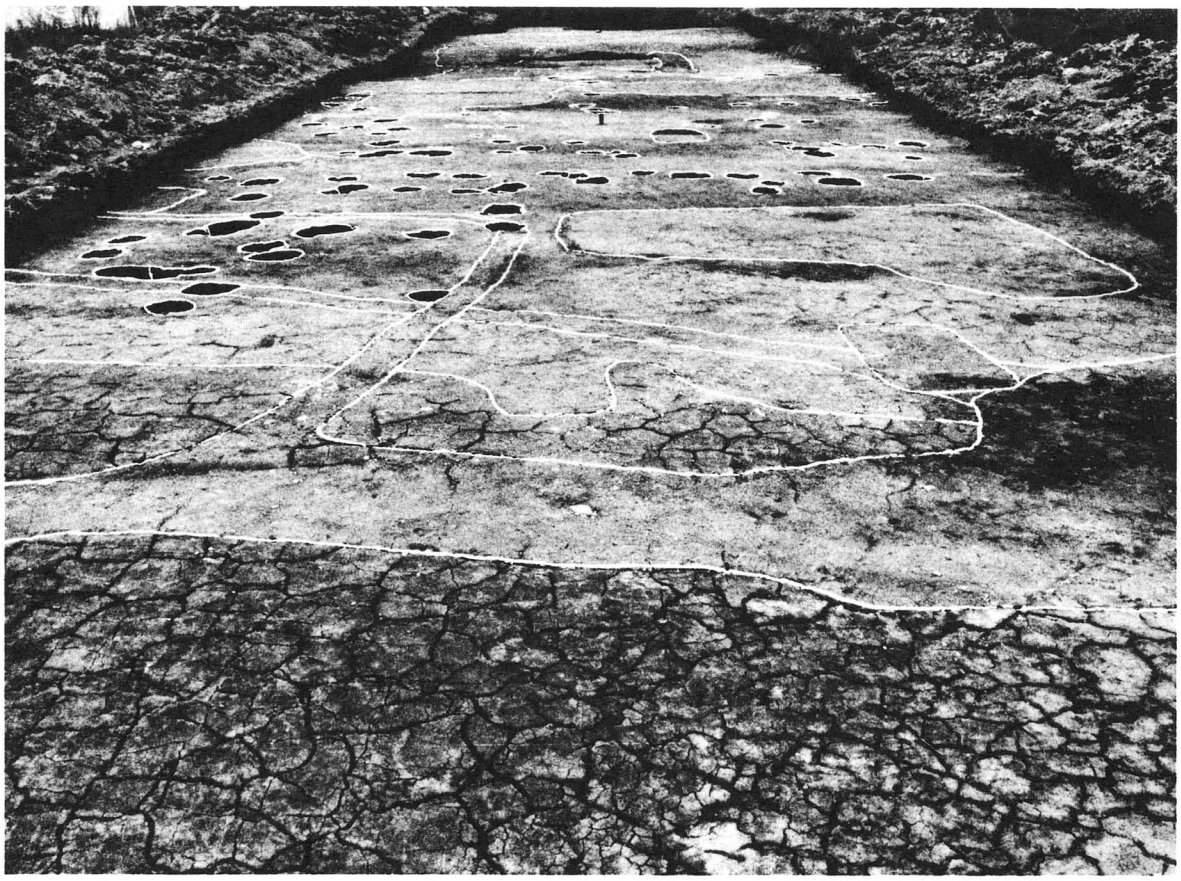
図　　版



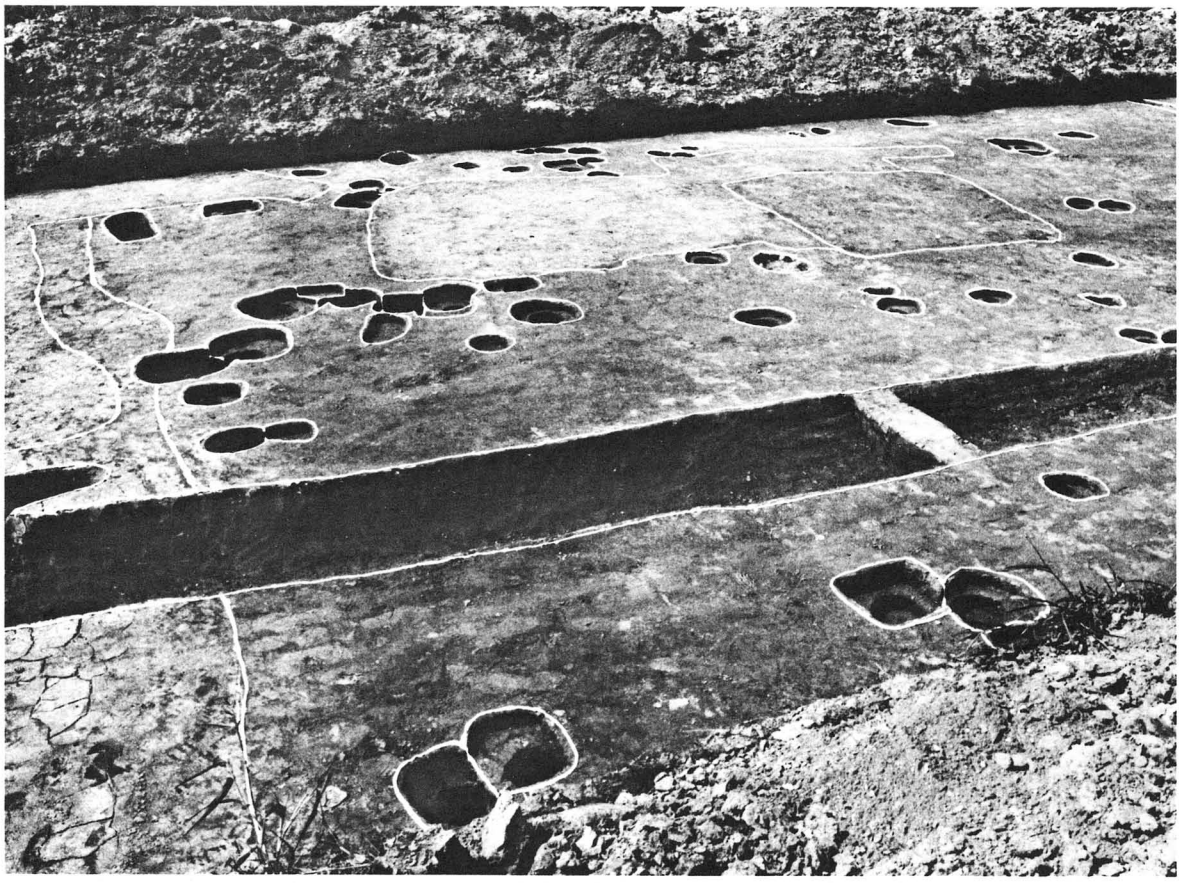
Ｓ１トレンチ　南西端掘立柱建物群〔Ａ群〕検出状況　（北西より）



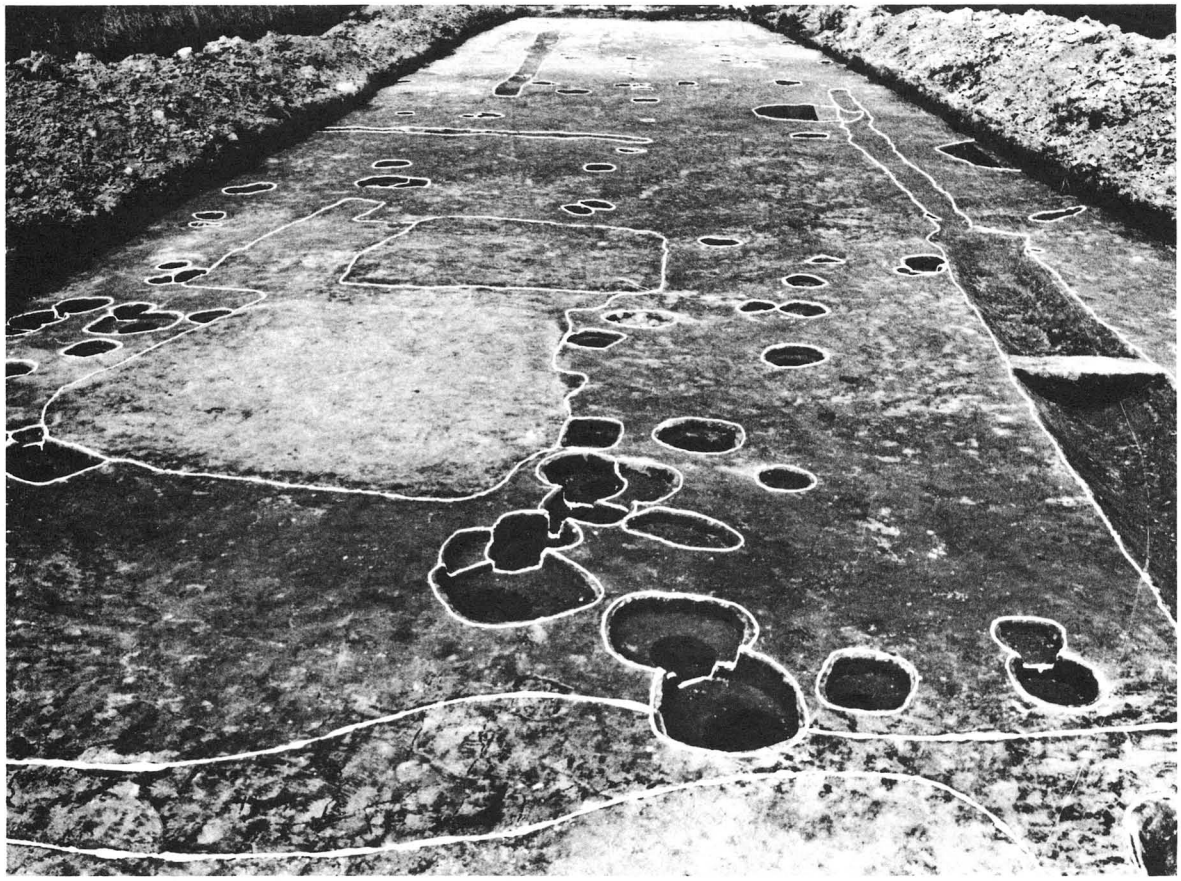
Ｓ１トレンチ　ＳＸ１及び周辺の掘立柱建物群〔Ｂ群〕検出状況　（南西より）



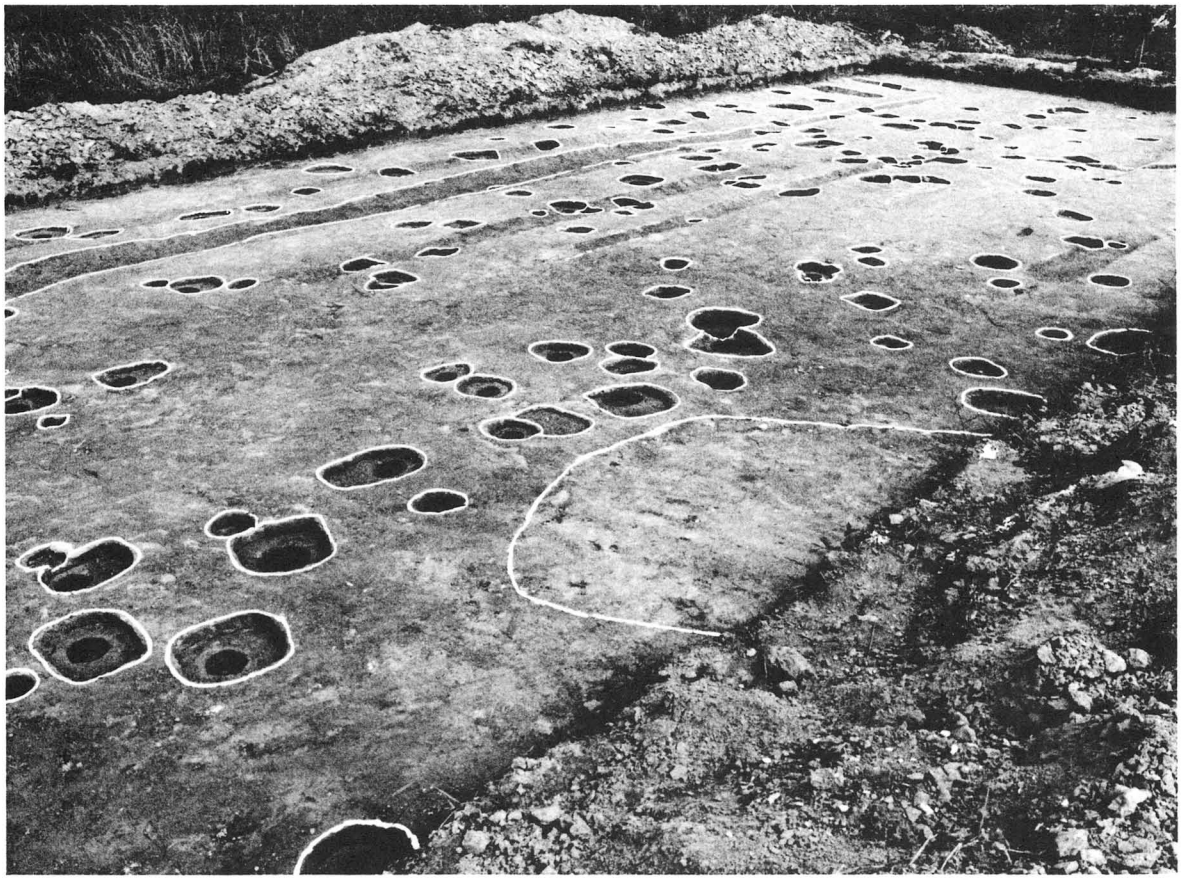
Ｓ１トレンチ　沼沢地上を流れるＳＤ３及びそれ以南に広がる掘立柱建物群〔Ｂ群〕検出状況（北東より）



Ｓ１トレンチ　ＳＤ14及び周辺の掘立柱建物群〔Ｃ群〕検出状況　（南より）



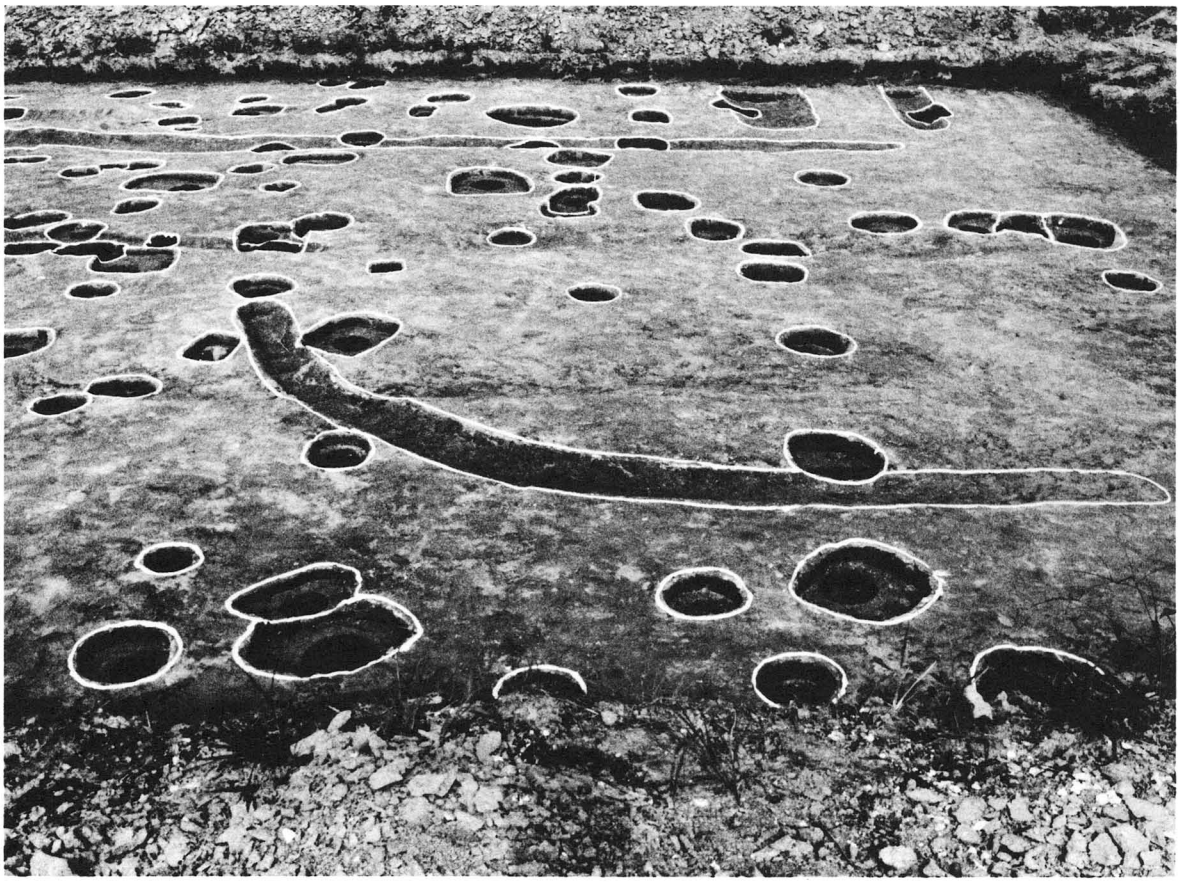
Ｓ１トレンチ　ＳＫ17・18・19及び周辺の掘立柱建物群〔Ｃ群〕検出状況　（南西より）



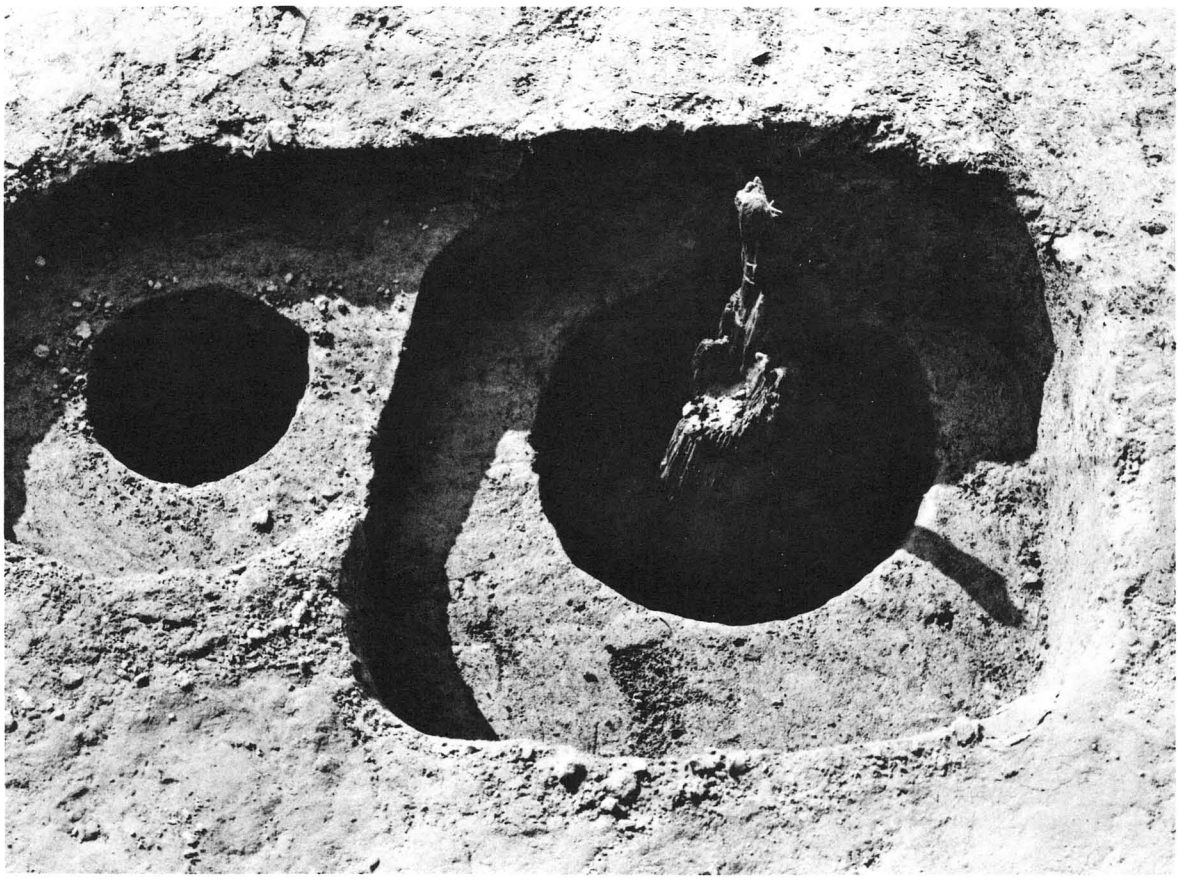
Ｓ１トレンチ　ＳＫ13及び周辺の掘立柱建物群〔Ｄ群〕検出状況　（南より）

Ｓ１トレンチ　北東端掘立柱建物群〔Ｄ群〕検出状況　（南西より）

Ｓ１トレンチ　北東端掘立柱建物群〔Ｄ群〕検出状況　（南西より）

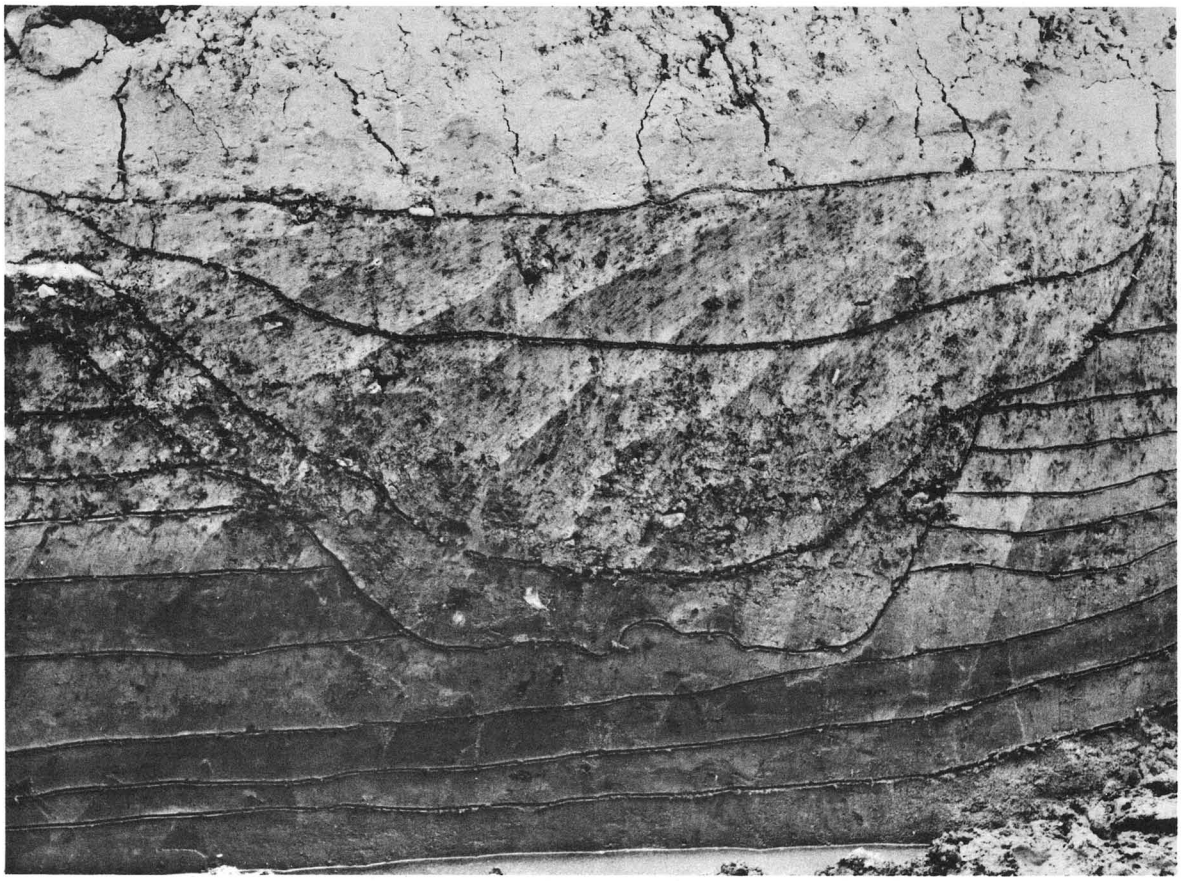


Ｓ１トレンチ　北東端掘立柱建物群〔Ｄ群〕検出状況　（南東より）

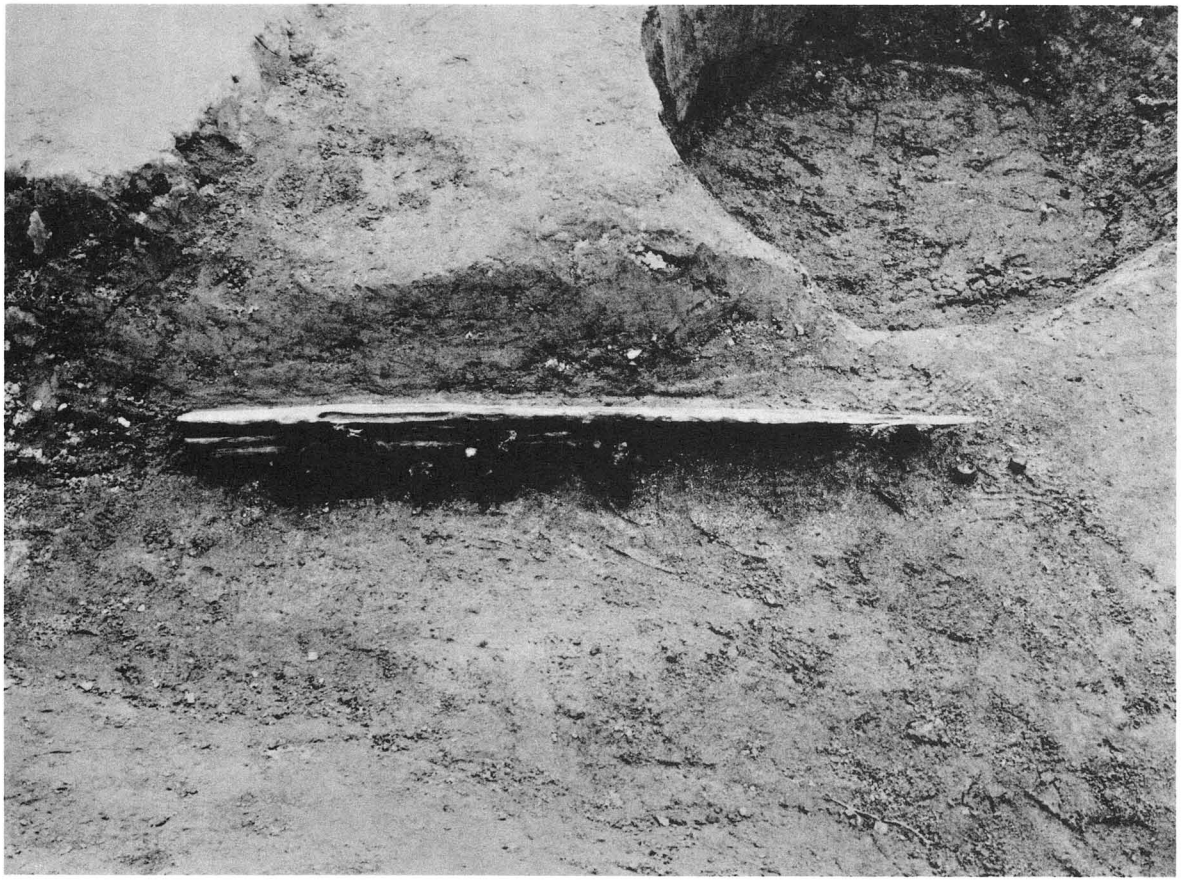


Ｓ１トレンチ　柱穴内柱根出土状況

Ｓ１トレンチ　ＳＫ２完掘状況　（北西より）



Ｓ１トレンチ　南東壁面ＳＤ３及び沼沢地断面図　（北西より）

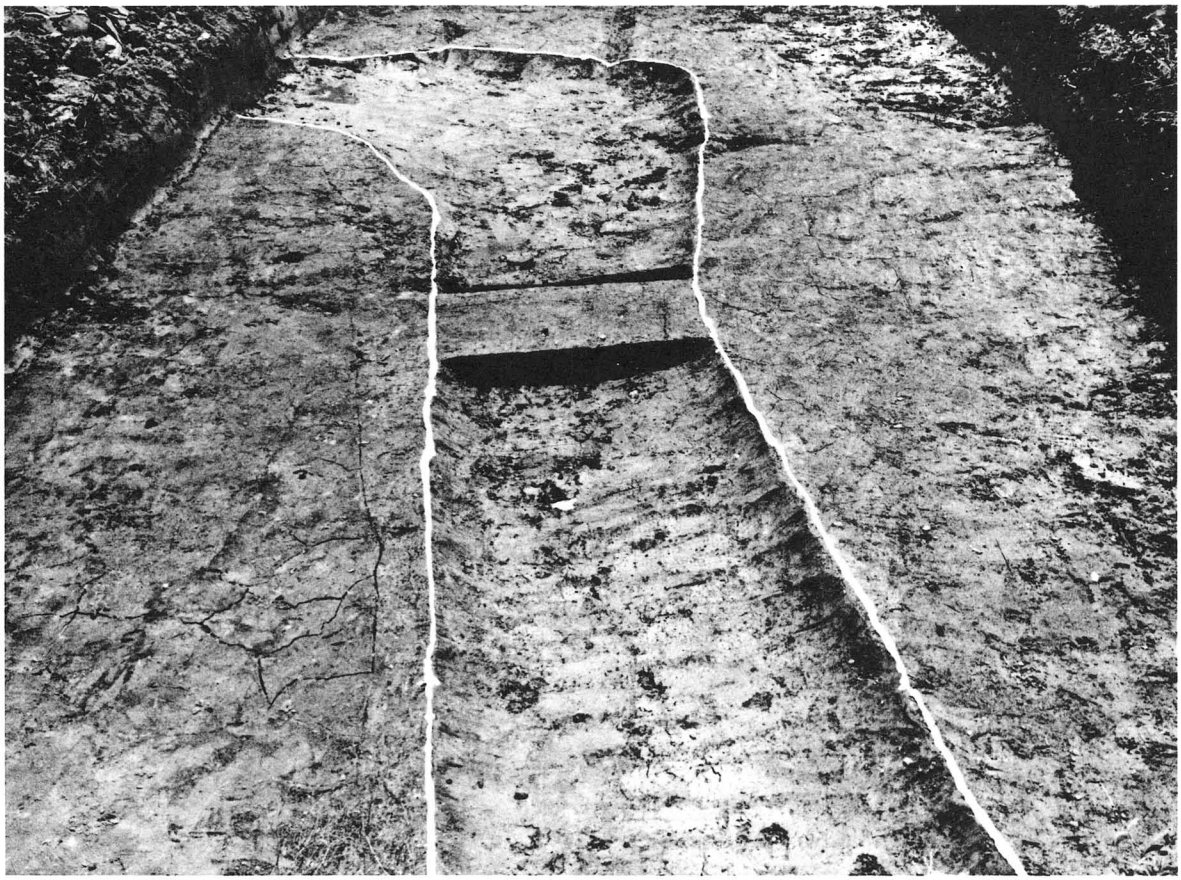


Ｓ１トレンチ　ＳＤ３護岸施設出土状況　（北東より）

Ｓ１トレンチ　ＳＸ１検出状況　（南西より）

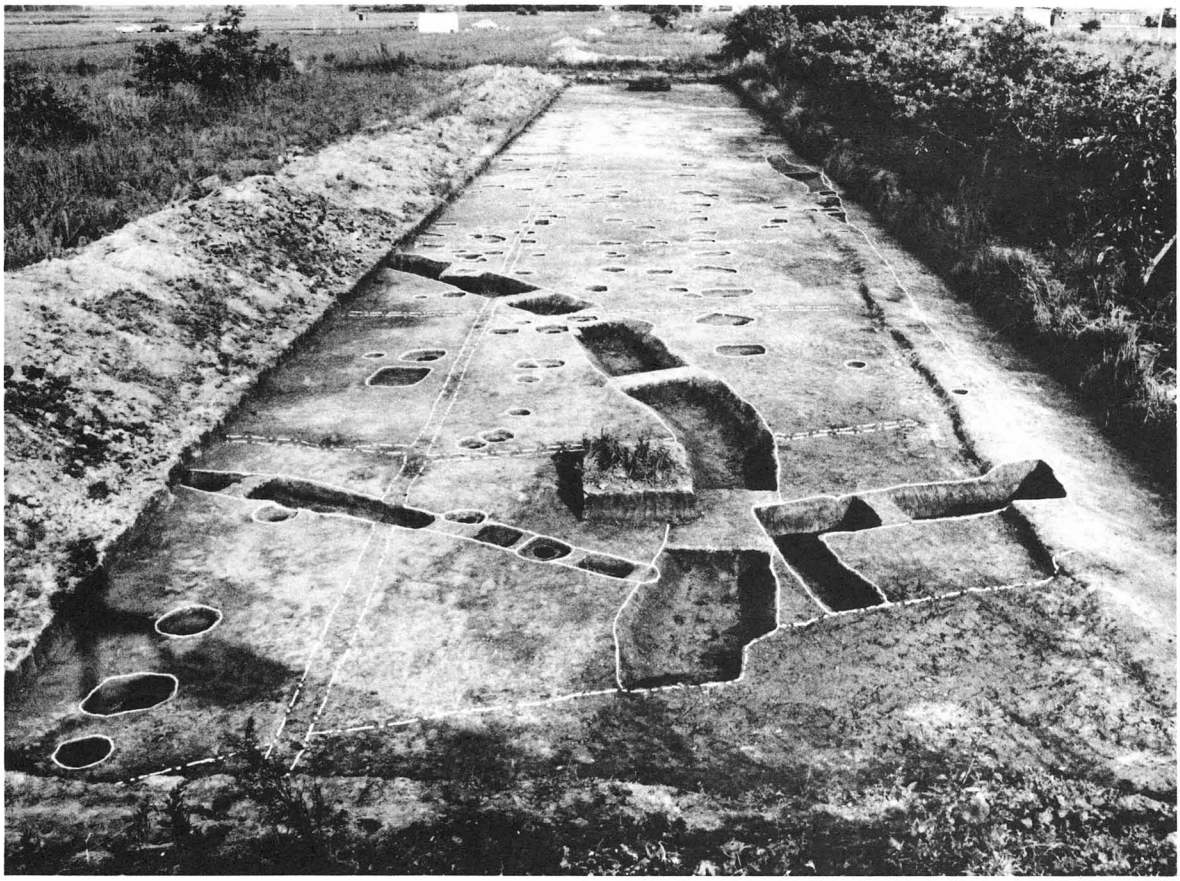
Ｓ３トレンチ　全　　景（南西より）

Ｓ12トレンチ　全　　景（南東より）

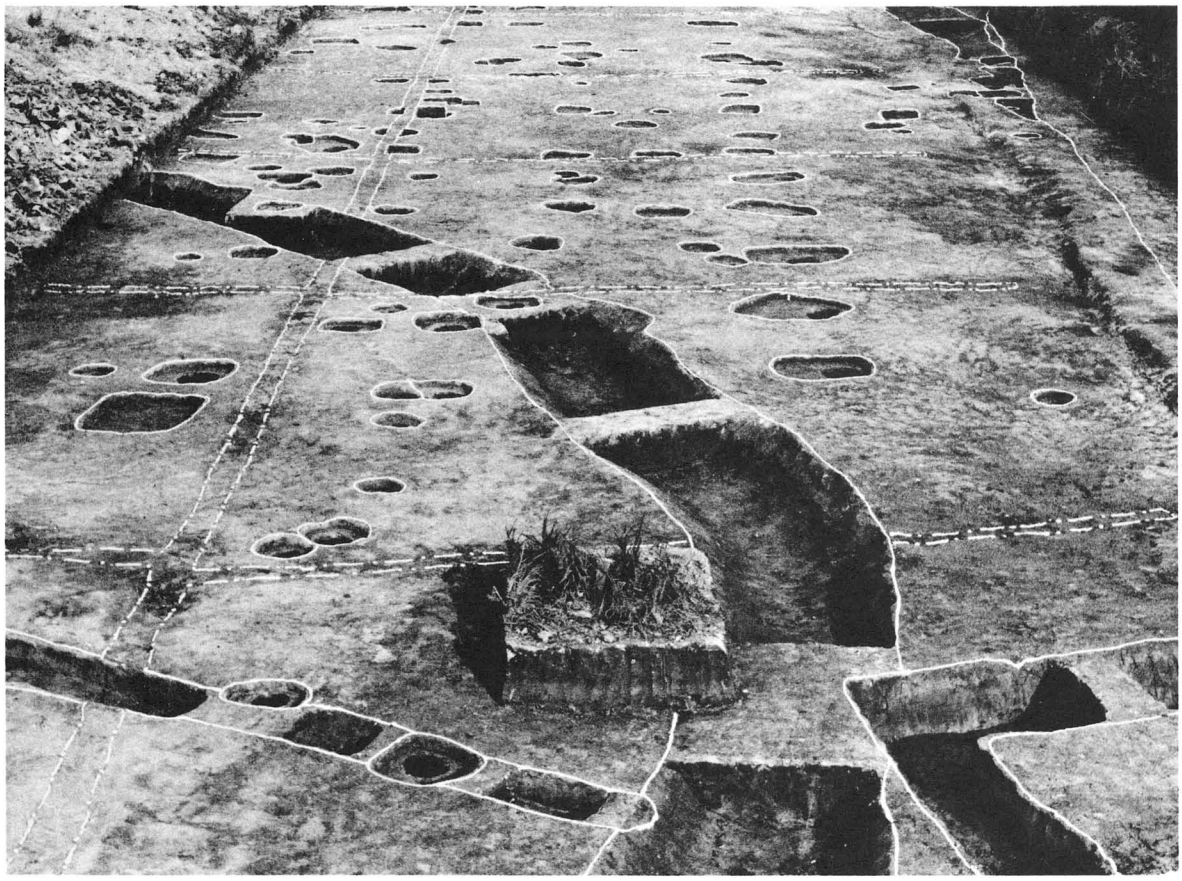


S16トレンチ　全　　景（北西より）

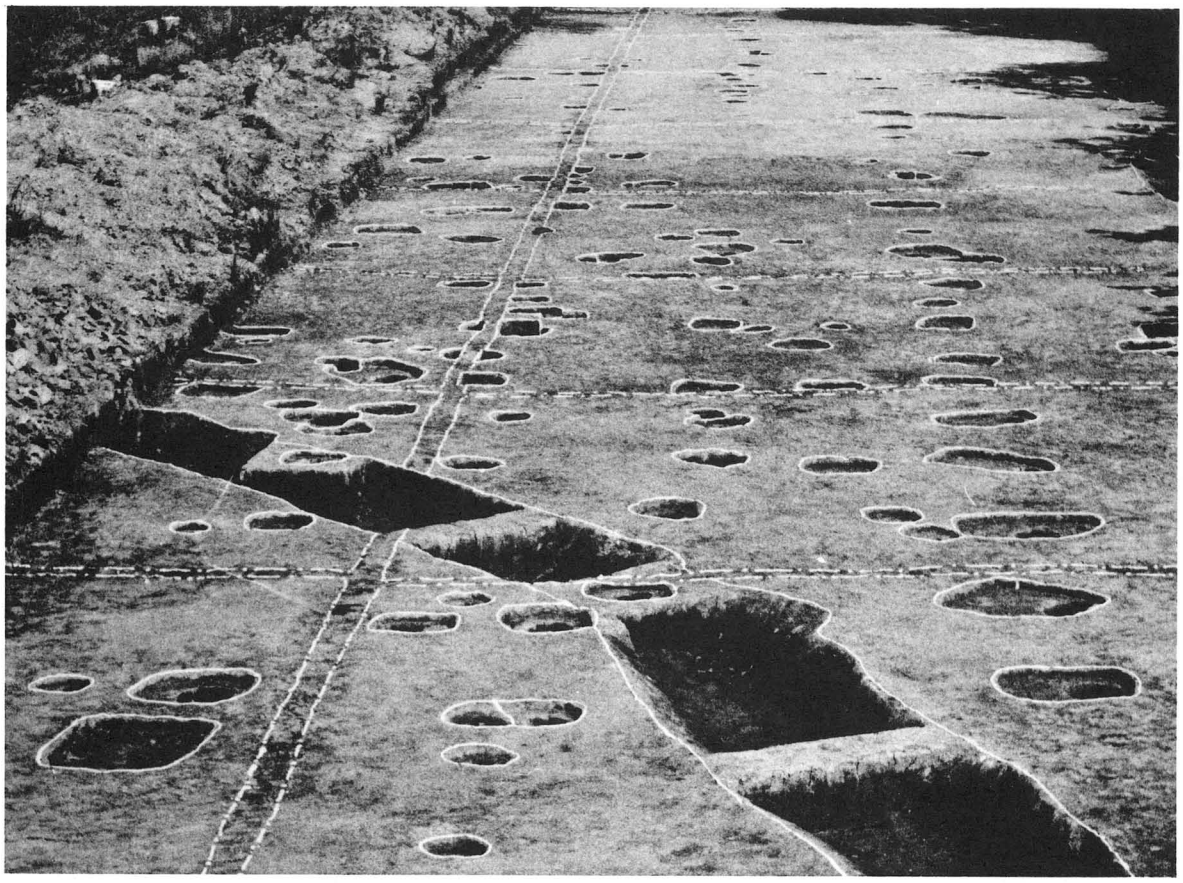
T10トレンチ　調査風景（北西より）



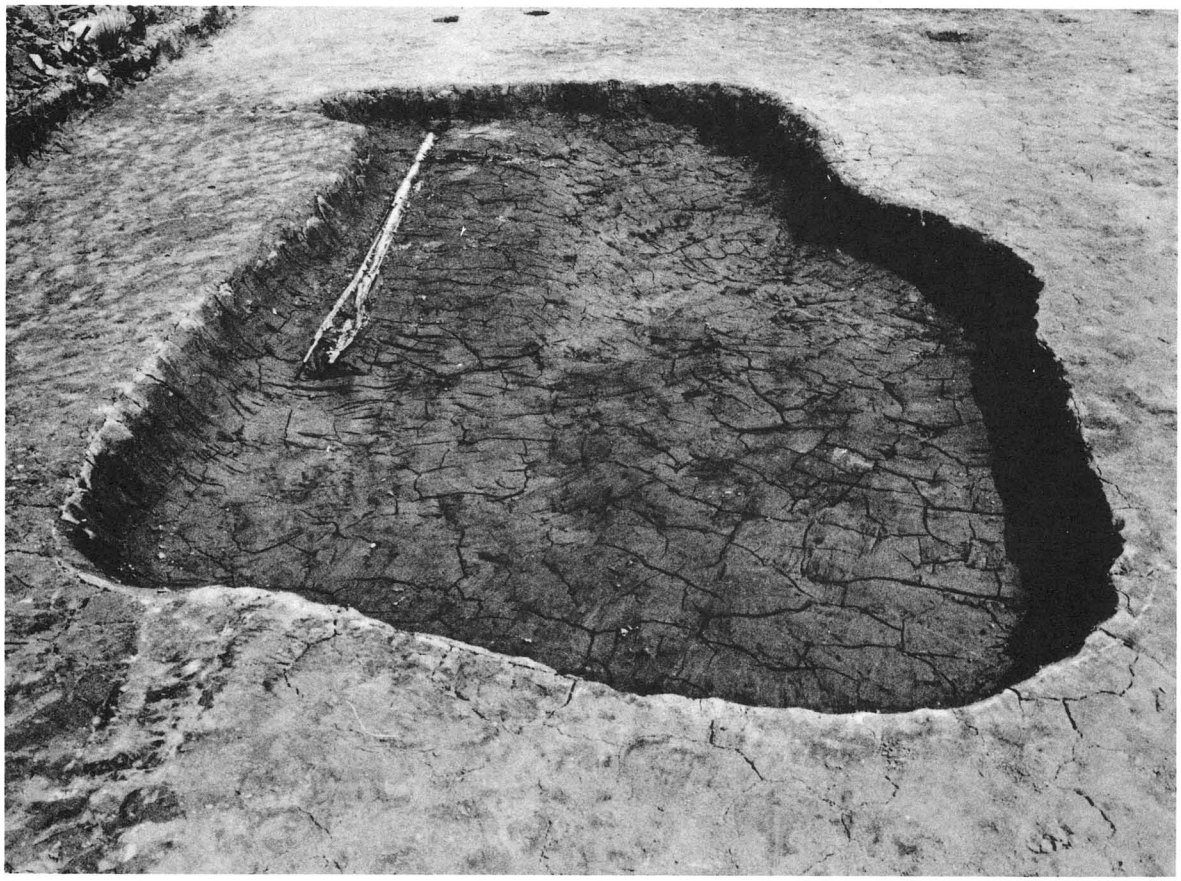
T10トレンチ　全　　景（北西より）



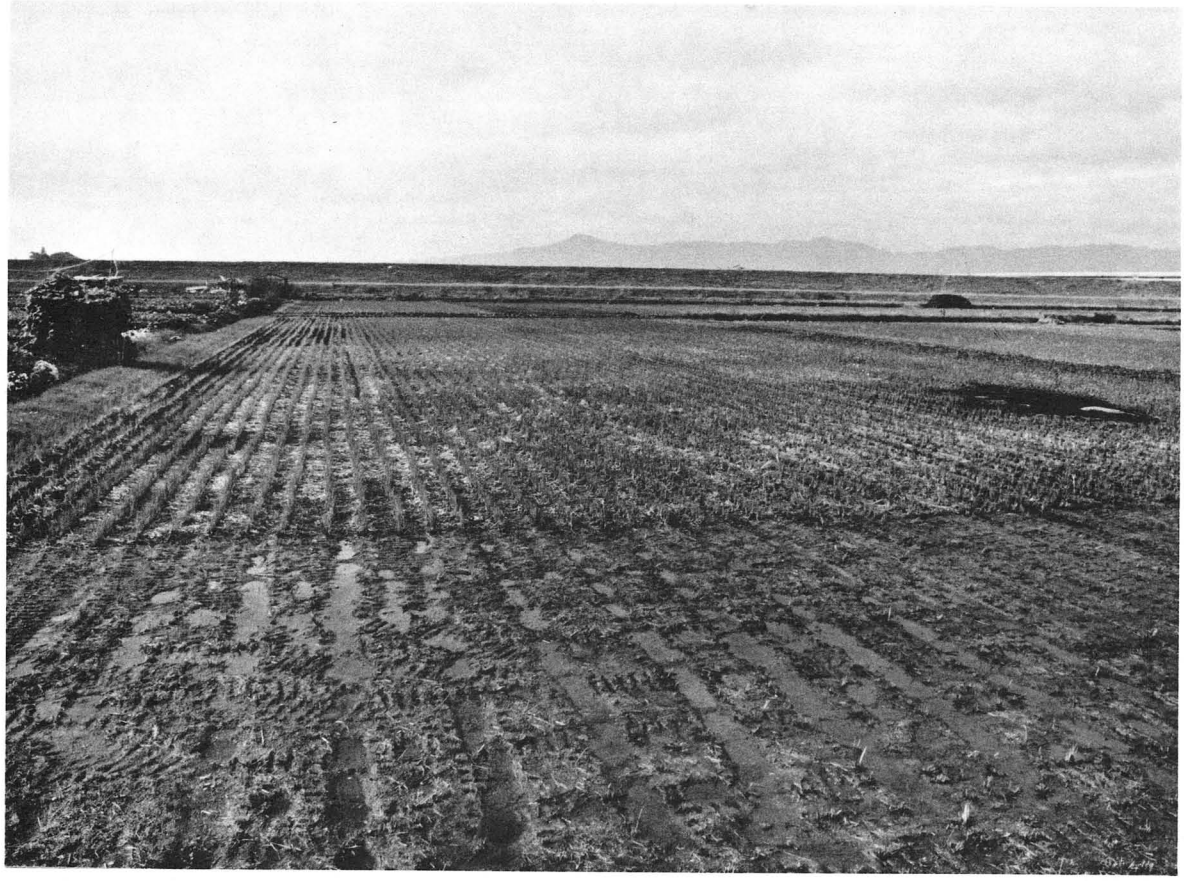
T10トレンチ　ＳＤ１及び周辺の掘立柱建物群検出状況（北西より）



Ｔ10トレンチ　掘立柱建物群検出状況　（北西より）



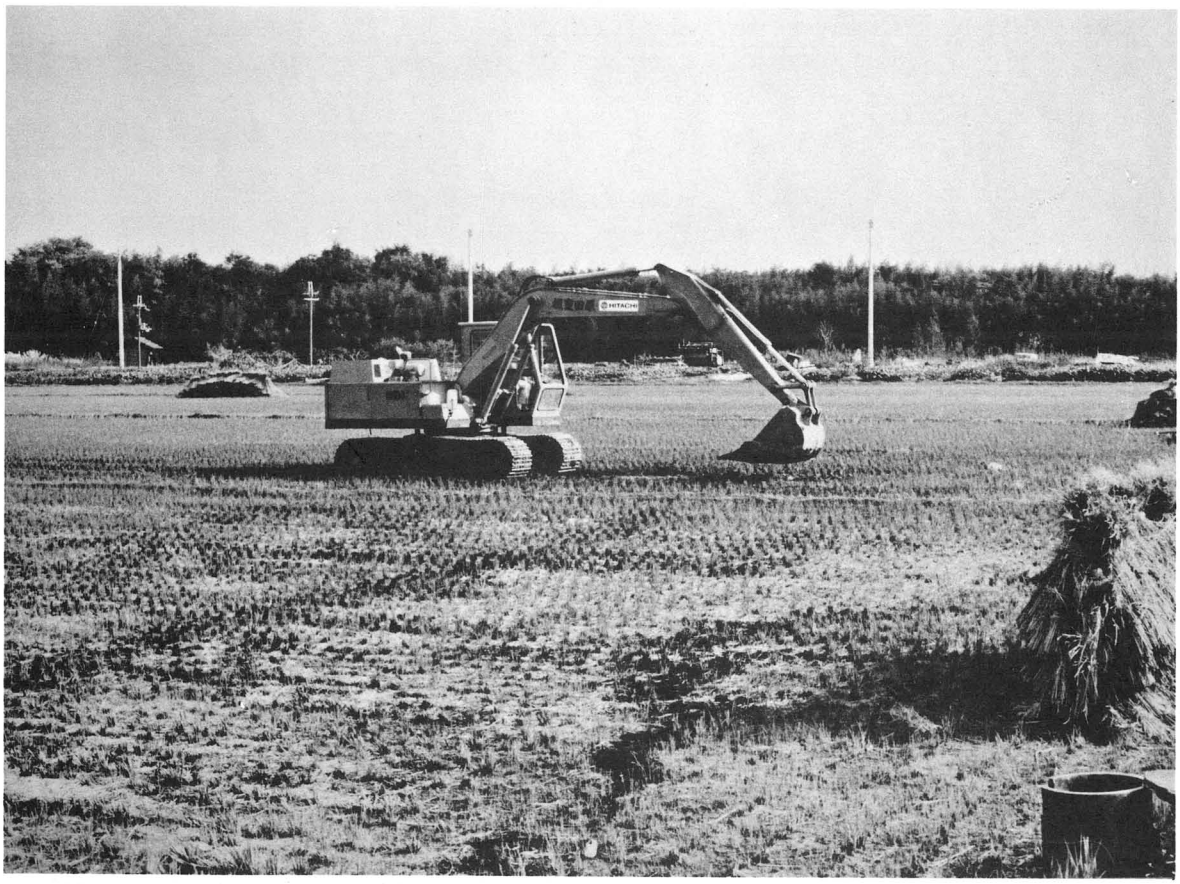
Ｔ10トレンチ　ＳＫ１検出状況　（北西より）



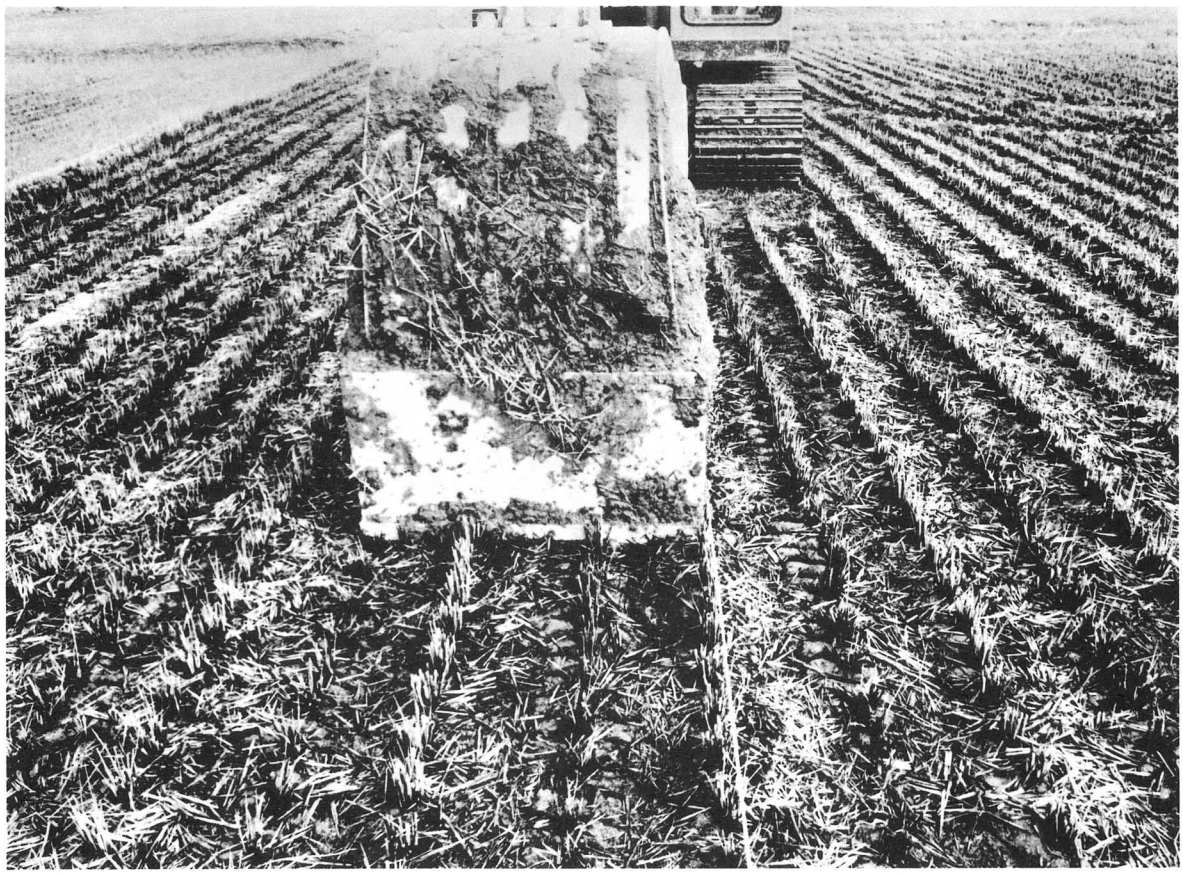
調査前全景

調査前全景

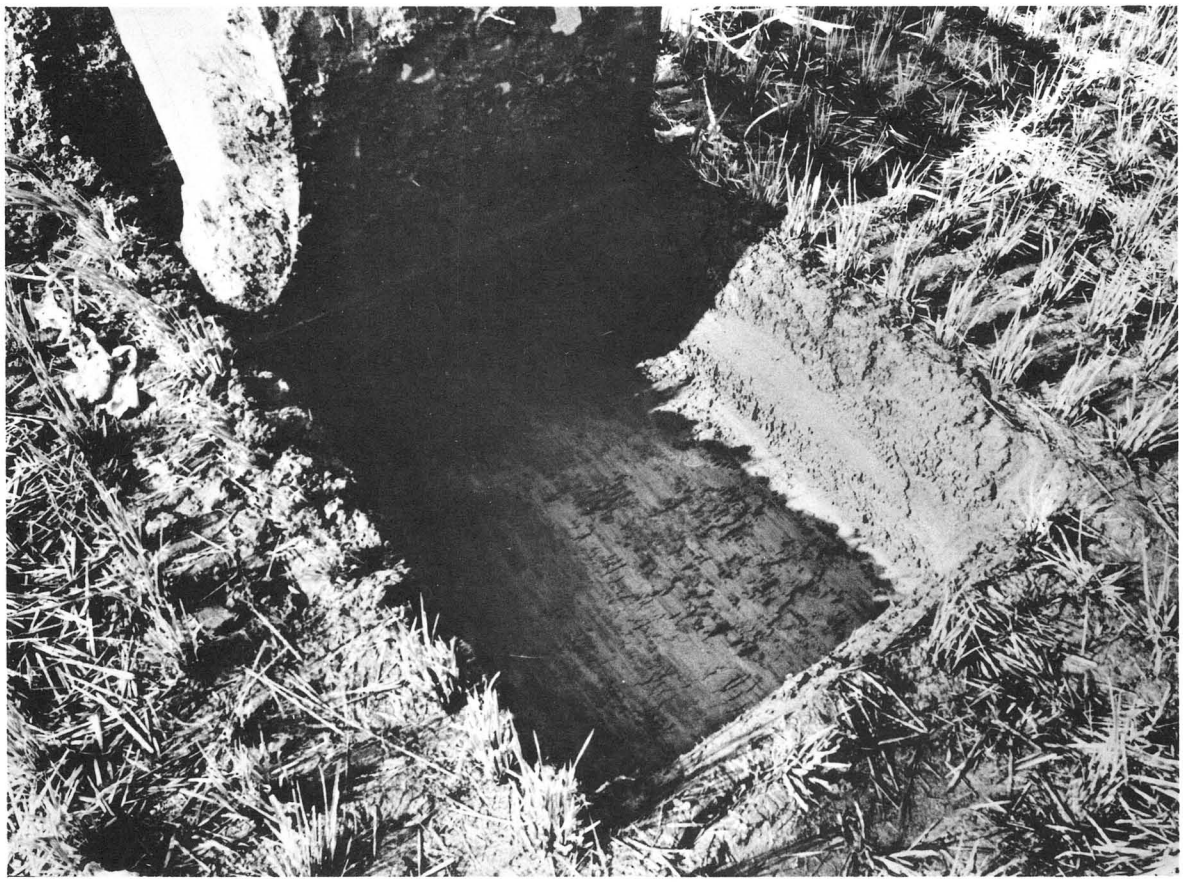
調　査　遠　景



埋めもどし状況



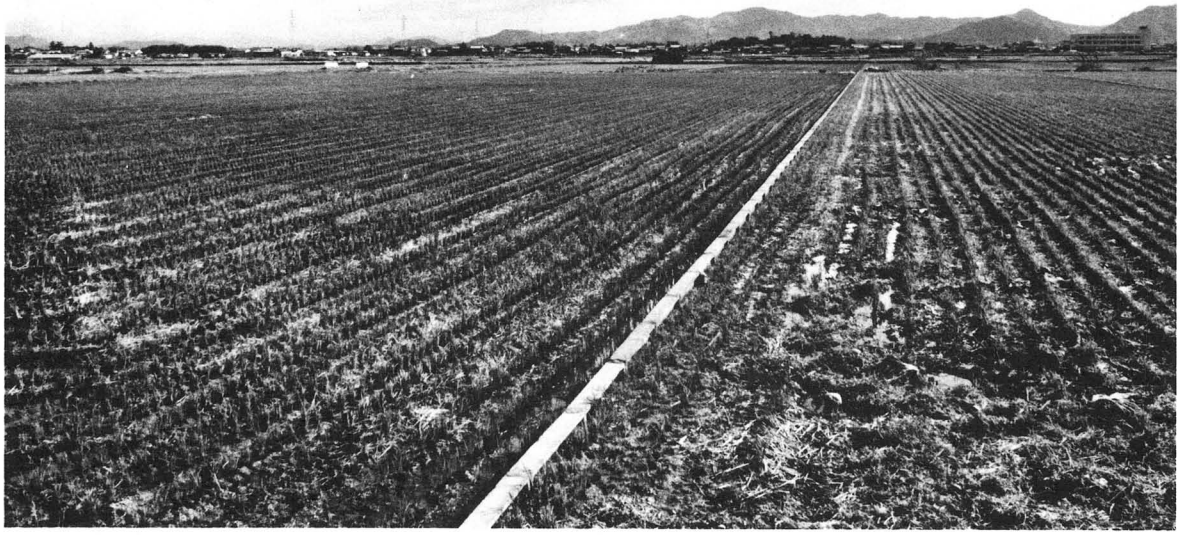
調　査　風　景



調　査　近　景

調　査　風　景

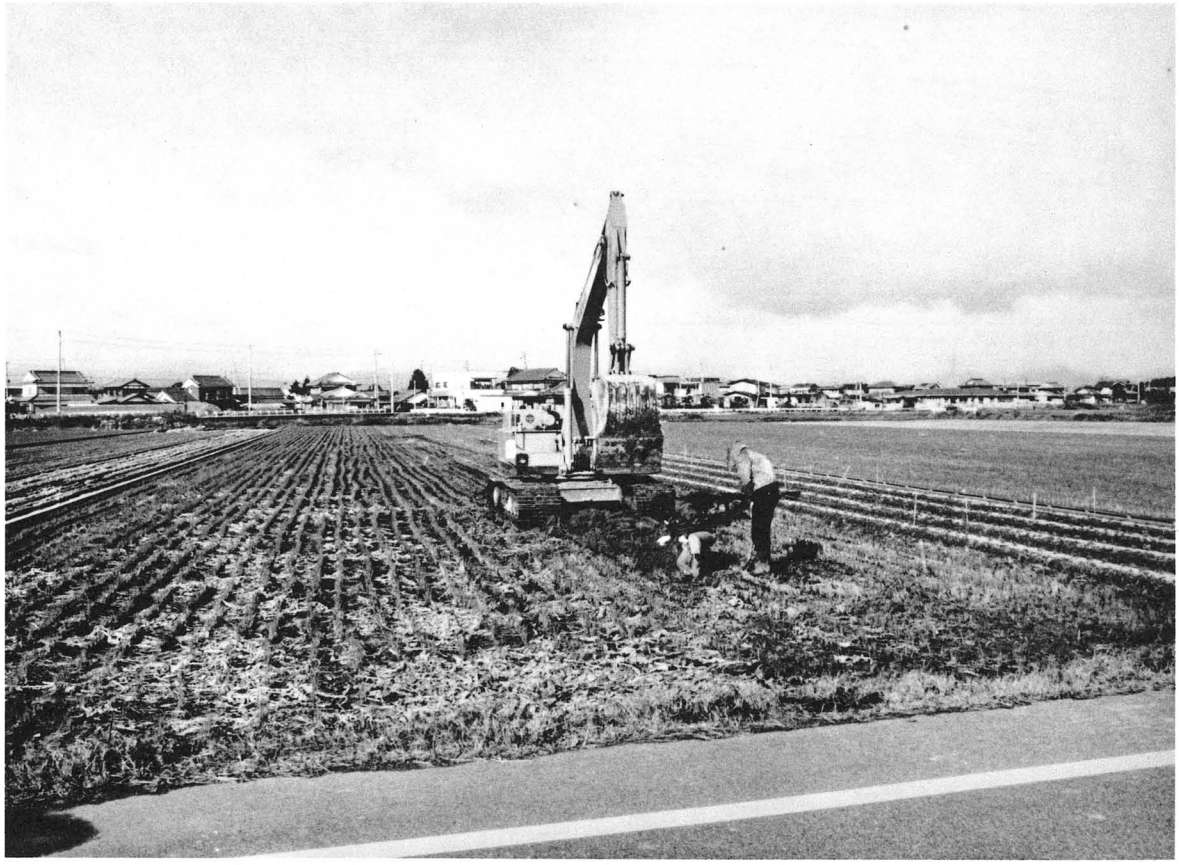
調　査　風　景



調査前全景

調査前全景

調査前全景



調査状況

調　査　状　況

調　査　状　況

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書
X－4 1983
昭和58年3月

編集・発行　滋賀県教育委員会
財団法人滋賀県文化財保護協会

印　　刷　株式会社中村太古舎

910